

# 環日本海交流史研究集会の記録

## 「中世日本海域の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・播鉢を中心に - 」

所長 谷内尾 晋司

### はじめに

石川県はもとより、日本海沿岸域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次でおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿岸域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

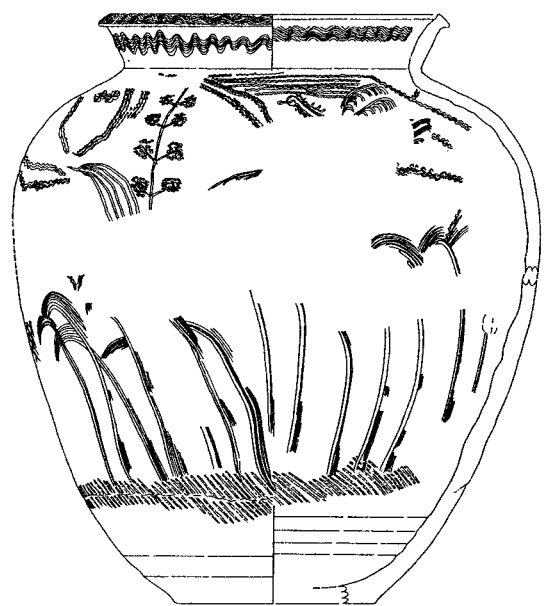
平成17年度は「中世日本海域の土器・陶磁器流通」をテーマに開催いたしました。

中世になると経済活動の活発化と流通ネットワークの発達により、国内外で生産された様々な商品が各地で消費される時代を迎えます。中でも今回中心テーマとして取り上げました甕、壺、播鉢は、日常物資として最も普遍的に消費された焼き物であり、東海、瀬戸内、そして北陸地方などを生産拠点に各地に流通圏を確立していたことが、集落や墳墓遺跡の発掘調査等で明らかにされつつあります。能登の珠洲焼、福井の越前焼は北陸の代表的な中世陶器として、主に北東日本海沿岸地域を中心に広く流通したことが知られ、窯跡など生産遺跡の調査も積極的に進められております。

このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、生産と消費の視点から、日本海沿岸域における中世土器・陶磁器の技術系譜・伝播および流通システムについて焦点を当てました。北部九州地方については佐賀県の徳永貞紹氏、山陰地方については島根県の榊原博英氏、北陸地方については福井県の岩田 隆氏、当センターの岩瀬由美氏、珠洲市の大安尚寿氏、富山県の宮田進一氏、新潟県の鶴巻康志氏、東北地方については山形県の山口博之氏にお願いし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

各地域における広域窯、地域窯の消長、技術的系譜やその伝播経路、地域社会との関わり方、生産地と消費地に集散地や輸送手段を含めた広域流通システムのあり方など、多岐にわたる問題や課題について討議され、相互理解を深めるとともに共通認識が得られたことは大変有意義でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



三引遺跡出土の珠洲焼刻画文（飛禽草樹文）壺

## 北部九州日本海域の中世土器・陶磁器 - 甕・壺・鉢を中心に -

徳永 貞紹（佐賀県教育庁）

北部九州の日本海域は、関門海峡から平戸島までの響灘・玄界灘一帯と壱岐・対馬を含む朝鮮海峡までの範囲で捉えられる。大陸との西の接点という地理的特質は、人や物が東アジア規模で動いた中世にあって殊に重要な意味を持った。



本地域は、主に煮炊具の様相と在地系土器生産の状況から東半部の豊前北部・筑前と西半部の肥前北部・壱岐・対馬に二分することができる。東半部・西半部とも貿易陶磁の普及率が高いという点で一致するが、西半部は土器生産が低調で搬入品に依存するという独自性が見られる。

北部九州における中世前期～近世初期の貯蔵具（甕・壺）と調理具（捏鉢・擂鉢）

中世前期の貯蔵具は、中国陶器を主体とし、朝鮮無釉陶器、知多（常滑）窯陶器、<sup>かばんじょう</sup>樺番城・龜山窯系・東播磨諸窯の須恵器系陶器などが少量ある。博多・大宰府では豊富な種類の中国陶器が多数遺されており、他地域でほとんど出土しない大型甕・壺の存在が特記される。調理具（捏鉢・擂鉢）も中国陶器が定量用いられるが、12世紀後半以降は東播磨諸窯捏鉢の搬入量が増加し、調理具の中心となる。

中世後期の貯蔵具は、備前窯陶器が急増し、中国陶器・知多窯陶器に取って替わる。調理具は、擂鉢が主体となり、備前窯擂鉢と在地系・防長系瓦質擂鉢が急増する。備前窯陶器の増加は備前Ⅳ期に顕著であり、知多窯甕・東播磨諸窯捏鉢から備前窯甕・擂鉢への転換という汎西日本的傾向と一致する。

近世初期（16世紀末～17世紀前半）には肥前陶器（唐津）・肥前磁器（伊万里）の生産開始と大量流通によって食器様式が大きく変化し、土器・陶磁器流通の上でも画期を成す。貯蔵具・調理具はいずれも急激に肥前陶器へ移行する。

中世から近世初期の日本海流通 - 北部九州と北陸との関係 -

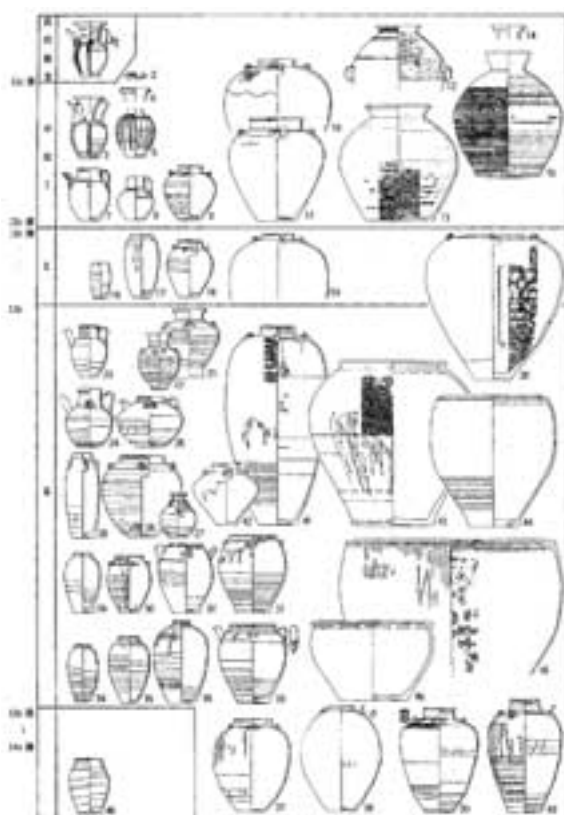
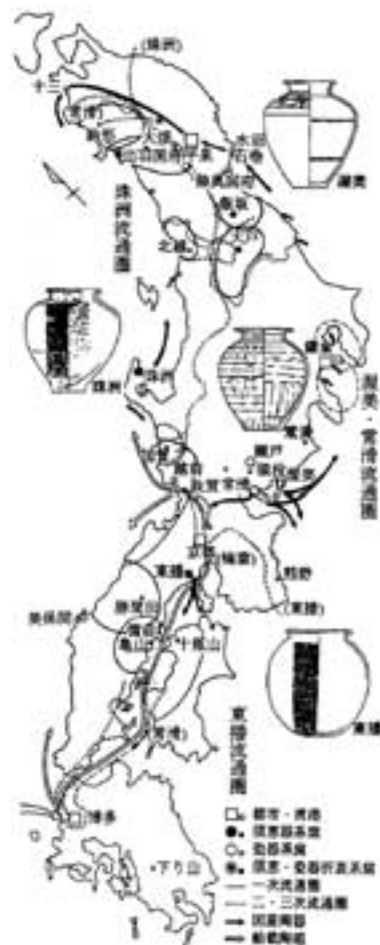
中世前期に北東日本海域に広く流通した珠洲窯の製品は、現在までの知見では北部九州に達しておらず、逆に九州地域で生産された広域流通品である滑石製石鍋は北陸地域にほとんど広がっていない。出土品としての食器に見る限り、中世前期における北部九州は、北陸との関係が希薄であり、むしろ瀬戸内海から畿内までの流通圏と太く繋がっている。

しかし、中世後期には日本海域の各地を繋ぐ広域な物資流通網・交通網が形成されたようで、14世紀後半～15世紀前半に若狭日引石製の石塔が日本海から東シナ海沿岸の主要港湾を中心に、北は十三湊から南は坊津まで広域に分布している。また、豊前小倉城跡から出土した越前窯擂鉢は、人の移動に伴うか他の物資に付随するかしてもたらされた副次的搬入品として位置づけられ、北部九州と北陸との隔地間流通を裏付けるものである。

近世初期に肥前陶器（唐津）続いて肥前磁器（伊万里）の生産が開始されると、その製品はたちまち全国的に広がり、とりわけ日本海沿岸域では安定した流通状況をみせる。このような日本海域の広域流通網は、中世後期において萌芽していたと言えるが、中世末までは北部九州との流通・交通を示す史・資料が、山陰からせいぜい若狭・越前あたりまでの範囲でしか確認できず、加賀・能登以北と北部九州との行き来は近世初期の豊臣政権による全国统一以降のことであろう。



中世から近世初期の主な港湾・都市（北部九州）



北部九州出土貿易陶磁甕・壺・鉢の編年

（山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性 10 九州・南西諸島」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集）

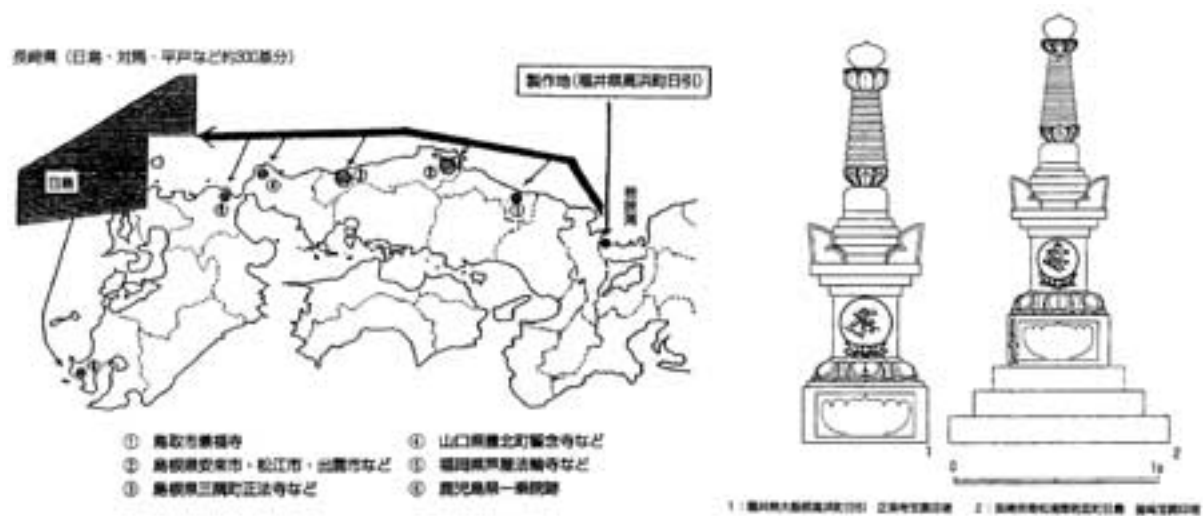
12世紀中葉～13世紀前半の都市と陶磁器流通圏

（吉岡康暢 1997「新しい交易体系の成立」

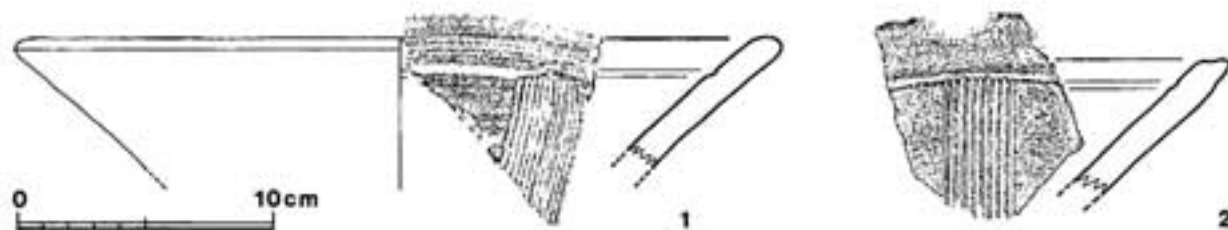
『考古学による日本歴史9 交易と交通』）



中国陶器大型甕・壺の分布  
(足立拓朗 2001「中世前期の大型褐釉陶器の流通経路」『青山考古』第18号)



西日本における日引石製石塔の分布、若狭と肥前の日引石製石塔  
(大石一久 2001「日引石塔に関する一考察」『日引』第1号)



小倉城跡出土の越前窯播鉢  
(北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997『小倉城跡2』)

## 山陰における中世の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・播鉢を中心に -

榊原 博英（島根県浜田市教育委員会）

山陰地域は東から因幡（鳥取県西部）・伯耆（鳥取県西部）・出雲、隠岐（島根県東部）・石見（島根県西部）に分けられている。近年、山陰では中世須恵器や貿易陶磁器の集成が行われているが、遺跡内の中世土器の産地・器種別の組成が詳細に示されたものはあまりない。



中世前期は東播系須恵器がほぼ全域で出土し、常滑焼などが少量みられる。14世紀中頃からは備前焼が多くなる。西の石見では博多方面からの中国陶器が少量みられる。山陰の在地系須恵器には岡山・勝間田系須恵器が強く影響を与えているが、岡山・勝間田の製品自体は因幡・伯耆に出土例が多い。越前焼は常滑焼などと十分に区別されていないが、中世後期には因幡・伯耆・出雲まで確認されている。

東播系須恵器は播鉢を中心に山陰全体に多く出土例があり、甕も出土している。沿岸部の平野の遺跡にとどまらず、山間部まで幅広く分布が見られる。

備前焼は間壁編年Ⅰ～Ⅱ期（12世紀末～13世紀代）は鳥取県東部（因幡）に少量みられ、Ⅲ期（13世紀後半～14世紀後半）には島根県でも出土する。間壁編年Ⅳ期（14世紀末～16世紀初頭）には出土量・遺跡密度が増え、特に播鉢が目立つ。間壁編年Ⅴ期（16世紀初めから17世紀初め）にはⅣ期に続き、城館遺跡を中心に壺・大甕・播鉢に加え、さまざまな器種が流通するようになる。Ⅵ期（17世紀前半頃）にはⅤ期に比べ量がやや減るが、富田川河床遺跡や石見銀山遺跡など都市遺跡では増えている。

常滑焼は常滑編年2～4型式（12世紀中葉～後葉）の古い段階の甕が島根で少量見られる。その後の時期も出土量は少ないが、山陰全体に出土が見られる。

越前焼は中世後期以降に因幡・伯耆・出雲で鉢・甕が少量出土しているが、石見では確認されていない。常滑焼と区別されず瓷器系と表現される場合が多い。出雲市青木遺跡では多くの越前焼（常滑・産地不明も多い）が出土している。

貿易陶磁器の壺（耳壺類）は経塚や集落遺跡で比較的出土例がある。甕・鉢は量的には少ないが石見を中心に点的に沿岸部の流通拠点や国府（府中）で出土する。

岡山・勝間田系須恵器は甕を中心に因幡・伯耆・出雲ではやや多く出土し、石見は少ない。地理的に近いのか、鳥取では出土例が目立つ。

在地系土器は松江市別所遺跡では焼け損じたような軟質のものや二次焼成をうけたものが多く出土し、近くで岡山・勝間田系の影響がある土器を焼いた可能性がある。器種は鍋・鉢・甕がみられ、軟質で外面格子叩き、内面は同心円叩きのちナデやハケ調整されるものが多い。在地系須恵器を中心とした胎土分析も行われている。

なお、山陰の西側、防長地域では山口市陶の（仮称）動物センター窯跡などで備前焼間壁編年Ⅲ期前半（13世紀後半～14世紀前半）に類似する壺・播鉢が焼かれていた可能性がある。また、萩市大井の上七重窯跡では常滑焼中野編年6b～7期（13世紀第4四半期～14世紀前半）に類似する甕が焼かれている。

北陸の様相と対比すると、東播系須恵器・備前焼の出土量など大きく異なっているが、越前焼や日引石製石塔など北陸方面からの流通がわずかにみられる。山陰はおおまかに京都・小浜あたりから西への流通が多い「因幡・伯耆・出雲」と西・東からの流通がみられる「石見・隠岐」に分けられる。

参考文献

伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登2004「中世陶器の物流 - 備前焼を中心に - 」

『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』同大会実行委員会

岩崎仁志2000「防長地域の中世陶器窯」『陶埴』第13号 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

木原光2005「益田市沖手遺跡と出土陶磁器」『日本貿易陶磁研究集会第26回研究集会資料集』

山陰中世土器検討会2003『中世須恵器の生産と流通 - 山陰地方を中心に - 』

島根県教育委員会2004『青木遺跡（中近世編）』

（財）鳥取県教育文化財団1998『米子城跡21遺跡』

（財）鳥取県教育文化財団2002『鳥取県西伯郡名和町茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・大山町富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』

中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

永原慶二編1995『常滑焼と中世社会』小学館

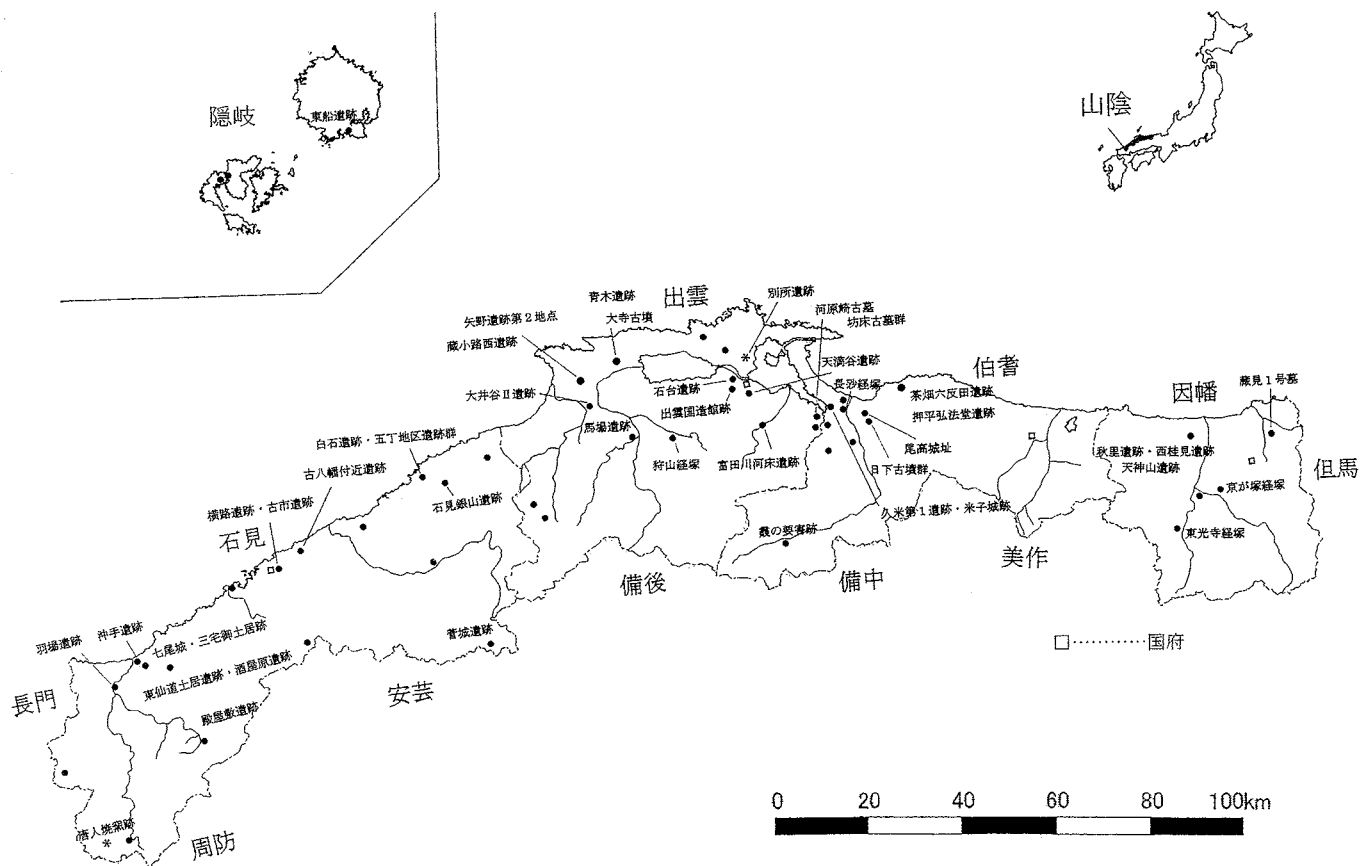
日本貿易陶磁研究会2002『中世後期における貿易陶磁器の様相』

乗岡実2005『備前焼の編年と流通』『島根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料』

間壁忠彦1991『備前焼』ニューサイエンス社

松江考古学談話会1992『松江考古』第8号

松江市教育委員会1988『薦沢A遺跡 薦沢B遺跡 別所遺跡』



# 甕・壺・播鉢の組成

	古市遺跡(石見)			横路遺跡(石見) (土器土地区、原井ヶ市地区の合計)		
東播	9	9.9%	鉢	5	10.6%	鉢
常滑	12	13.2%	口縁2			
備前	18	19.8%	播鉢Ⅳ期5、Ⅴ期7	10	21.3%	播鉢Ⅲ期1、Ⅳ期2
亀山	8	8.8%	同一個体?			
中国陶器鉢	15	16.5%	鉢口縁9、破片8、	2	4.3%	
中国陶器甕	1	1.1%		9	19.1%	同一個体?
土師質	6	6.6%	播鉢など	4	8.5%	播鉢など
瓦質	14	15.4%	播鉢、鍋など	11	23.4%	播鉢、鍋など
滑石製鍋	8	8.8%	長崎産?	5	10.6%	長崎産?
瀬戸				1	2.1%	鉋皿
計	91	100.0%		47	100.0%	

	喜時雨遺跡(石見)			殿屋敷遺跡(石見)		
土師質・鍋鉢	142	24.0%		16	34.0%	
土師器・鉢	48	8.1%				
瓦質鍋	275	46.5%		19	40.4%	
瓦質鉢	79	13.3%				
常滑系	8	1.4%		5	10.6%	甕
瀬戸美濃	2	0.3%	天目など	1	2.1%	鉢
東播	15	2.5%	播鉢			
備前	23	3.9%		6	12.8%	播鉢
計	592	100.0%		47	100.0%	

	七尾城(石見)			三宅御土居跡(石見)		
備前	32	12.7%		83	11.6%	
瀬戸美濃	12	4.8%	天目、瓶子など	7	1.0%	鉋皿など
常滑		0.0%		17	2.4%	
瓦質土器	52	20.6%		360	50.3%	
土師質鉢・鍋	156	61.9%		215	30.0%	
東播				33	4.6%	鉢
中国陶器鉢				1	0.1%	
計	252	100.0%		716	100.0%	

	沖手遺跡(石見)		
土師質・鍋	30	4.7%	足鍋1
土師器・鉢	63	9.8%	播鉢46、鉢17
瓦質鍋	82	12.7%	足鍋15
瓦質鉢	158	24.5%	鉢69、播鉢89
常滑系	19	2.9%	甕16、壺3
瀬戸美濃	42	6.5%	椀、天目など
東播	15	2.3%	鉢
備前	105	16.3%	播鉢42、壺29など
瓷器系	53	8.2%	播鉢12、甕10など
中世須恵器	65	10.1%	鉢13、甕25など
石鍋	13	2.0%	
計	645	100.0%	

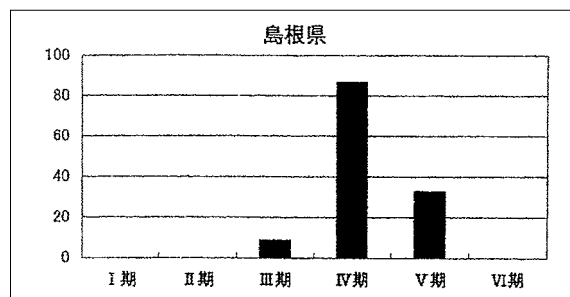
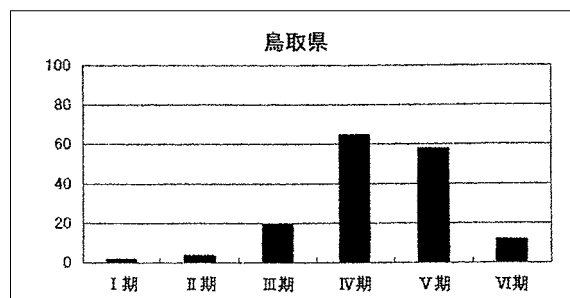
各遺跡の報告書、日本貿易陶磁研究会2002より榊原作成  
甕・壺・播鉢のみを集計し、分類の表現は統一していない。

	大井谷Ⅱ遺跡(出雲・寺院跡)			矢野遺跡第2地点(出雲)		
土師質播鉢	12	7.3%		27	11.0%	
土師質鍋	2	1.2%				
瀬戸美濃	29	17.7%	燗台・椀・瓶など	3	1.2%	皿
瓦質鉢類	23	14.0%		38	15.5%	
瓦質鍋	34	20.7%		15	6.1%	
備前	14	8.5%	播鉢12、甕2	4	1.6%	播鉢3、壺1
瓷器系鉢	15	9.1%		1	0.4%	
瓷器系甕	21	12.8%		150	61.2%	
亀山系	11	6.7%	甕			
東播	3	1.8%	鉢	7	2.9%	鉢
計	164	100.0%		245	100.0%	

	富田城 本丸・二ノ丸・三ノ丸(出雲)			浦の谷Ⅱ遺跡・外浜遺跡(隠岐)		
備前	2,200	98.4%	甕、壺、徳利等			
瀬戸美濃	23	1.0%	天目、瓶など	3	7.3%	皿など
越前	7	0.3%				
常滑系	2	0.1%		20	48.8%	
瓦質鍋・鉢	2	0.1%	鍋	11	26.8%	鉢
瓷器系	2	0.1%				
土師質鉢				3	7.3%	
東播				4	9.8%	鉢
計	2,236	100.0%		41	100.0%	

	米子城跡21遺跡(伯耆)			茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡(伯耆)		
土師質土鍋	135	9.4%				
土師器・甕	1,229	85.3%				
瀬戸美濃	3	0.2%				
常滑	1	0.1%		13	16.5%	
土師器・鉢	34	2.4%				
信楽	1	0.1%				
越前	1	0.1%		5	6.3%	
備前	11	0.8%		17	21.5%	
焼締陶器	17	1.2%				
土師器・瓦質	9	0.6%				
勝間田系				44	55.7%	
計	1,441	100.0%		79	100.0%	

備前焼出土数



伊藤晃ほか2004・乗岡2005から

## 越前焼甕・壺・鉢（擂鉢）の生産・流通・消費

岩田 隆（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）



### 1．越前焼の系譜と消長

越前焼は12世紀末ごろ東海地方からの瓷器系の技術を導入して成立する。当初は須恵器を生産していた天王川の東部の丘陵に越前焼の窯が営まれたが、鎌倉前期にはより耐火度の高い粘土を求めて天王川西部の丘陵の谷に越前焼の窯が築かれ始め、鎌倉中期には西部丘陵全面に展開するようになった。室町時代になると窯数が減少し始め、戦国時代後半から窯が大型化するとともに窯数をさらに減少させ、平等の谷周辺に収束する傾向が強まる。越前古窯址の範囲と分布については、丹生郡旧織田町、宮崎村の天王川を挟んだ丘陵に東西3km、南北6kmの広い範囲に約200基が確認されている。

### 2．流通状況

越前国内における12世紀後半の越前焼の商圈は、敦賀市深山寺経塚群に越前焼がみられないように南は木ノ芽峠を超えることは出来ず、北へのそれはおそらく越前国内にとどまるであろう。逆に江波経塚群のように越前焼生産地近くまで、常滑焼や珠洲焼が流入してきている。13世に入っても前半まではこの状況が大きく変わることはなかった。越前焼の生産地から20kmと離れていない鯖江南屋敷中世墳墓群でも加賀焼が出土している。しかし、後半にはいると加賀南部の三木だいもん遺跡では越前焼の鉢が出土しており、すこしずつ生産も上がっていったらしくその販路を拡大していった。14世紀になると平泉寺など九頭竜川以北でもそのほとんどが越前焼で、加賀焼・珠洲焼が僅かに残るだけとなり、15世紀には全て越前焼となる。

北部日本海側では14世紀半ばには北海道志海苔館の銭亀遺跡のように北海道にまで越前焼がみられるようになる。十三湊でも越前焼が出土している。この時期の越前焼と珠洲焼との比は1：4で、鉢類にいたってはそのほとんどが珠洲焼である。同じ湊町でも越前に近い普正寺遺跡の場合は、越前焼と珠洲焼がほぼ拮抗している。15世紀半ば以降、能登半島でも越前焼が流入するようになる。外浦に位置する道下元町遺跡では15%以上越前焼が占めるようになり、内浦にある西川島遺跡群でも15世紀後半には越前焼が搬入されているようである。普正寺遺跡では珠洲焼と越前焼の出土量が逆転し、甕類は珠洲焼が激減する。珠洲焼は15世紀中葉から甕・壺の生産を減少させ鉢類に特化していく。これに対して越前焼は生産地を平等谷に集中させるとともに窯を大型化し、甕・壺・鉢という基本三種は維持しながら、それぞれ形のバラエティーとサイズを増加させ、需要に応えていった。

16世紀になると北部日本海側では越前焼は珠洲焼に完全に取って代わる。生産におけるその象徴が岳の谷古窯跡群である。全長30m近い大窯を計画的に築造し、製品や燃料を1箇所集中して生産の効率を上げていったものと推定される。それはおそらく劔神社の指導のもと惣村規模で共同窯を運営し、その流通には敦賀あたりの新興回船業者が介在していたと想定される。こうした新しい結びつきこそ越前焼が15世紀後半以降その販路を急速に拡大し、16世紀には珠洲焼を駆逐して北東日本海側を一元的に制覇した原動力であったと推定されている。

西日本側の越前焼の流通状況については、若狭国では田島元山谷経塚群や山田中世墓群に見られるように13世紀後半以降越前焼の商圈に入っているらしいが、常滑焼や丹波焼、東播系の製品も流入してきている。14世紀には由良川河口出土と伝えられる「嘉元四年」（1306）の甕が著名で、この付近までは越前焼の商圈に含めることが出来るよう。



図1 越前焼 編年表

	甕の口縁部	甕	壺	鉢
12世紀後半～13世紀前半				
13世紀後半				
14世紀前半				
14世紀後半				

	甕の口縁部	甕	壺	鉢
15世紀前半				
15世紀後半				
16世紀前半				
16世紀後半				

(「越前名陶展」の編年表を基に一乗谷出土遺物に置き換え)

第1表 陸奥国 十三湊遺跡

	14C	14C 後半～ 15C 前半	合計
越前 甕・壺	215	359	574
鉢	2	1	3
合計	217	360	577
珠洲 甕・壺	447	257	704
鉢	302	345	647
合計	749	602	1351

榊原繁高 2004 「十三湊の都市構造と変遷」より

第2表 越中国 梅原胡摩堂遺跡

	I 12C 後半	II 13C 前半	III 13C 後半	IV 14C	V 15C 前半	VI 15C 後半	VII 16C 前半	16C 後半	合計
越前 甕				2	1		9	7	19
壺				2			1	1	4
鉢								3	3
合計				4	1		10	11	26
珠洲 甕	21	10	22	42	41	10			146
壺	16	5	16	11	2				50
鉢	45	27	8	29	41	7			157
合計	82	42	46	82	84	17			353

「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告」遺物編から作成

第3表 加賀国 普正寺遺跡

	II・III 13C	IV 14C	V・VI 15C	合計
越前 甕・壺	1	11	12	24
鉢	2	3	7	12
合計	3	14	19	36
珠洲 甕・壺	1	8	1	10
鉢	2	4	13	19
合計	3	12	14	29
加賀	4	2	0	6

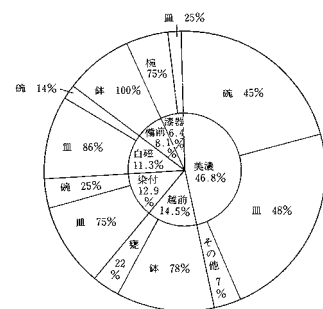
吉岡康暢 1989 「日本海域の土器・陶磁」(中世編)より

第4表 加賀国 白江梯川遺跡・三木だいもん遺跡

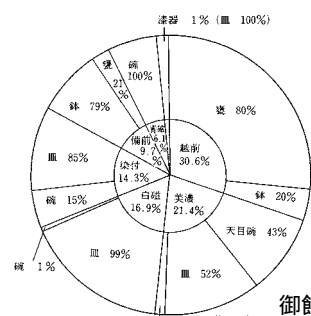
	三木だいもん遺跡 12C～13C	白江梯川遺跡 14C～15C	合計
越前 甕	5	22	27
壺	1	6	7
鉢	13	49	62
合計	19	77	96
加賀 甕	72	23	95
壺	3	8	11
鉢	15	9	24
合計	90	40	130
珠洲 甕	36	14	50
壺	31	1	32
鉢	7	24	31
合計	74	39	113

藤田邦雄、宮下幸夫1989  
「北陸における越前陶の諸問題」より

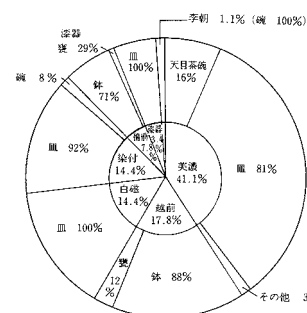
第5表 能登国 西川島遺跡群(16世紀)



白山橋遺跡



御館遺跡



大町・縄手遺跡

## 珠洲窯の概要

大安 尚寿（珠洲市教育委員会）



珠洲窯は、基本的な製作技法（叩き成形、櫛目施文、還元焰焼成、窯形式など）は、須恵器系（東播系窯）の技法をとっているが、押印による装飾や器種・器形に、瓷器系（渥美・常滑窯）の影響も色濃い。創業に際して、その分布域と成立時期が若山荘にほぼ重なることから、荘内産業振興を意図した領主の関与があったと目されている。窯跡は、これまでに4支群12小群約40基が発見されている。

・三崎支群 寺家クロバタケ窯（三崎町寺家） 大屋ヒヤマ窯（三崎町大屋）

・馬縹<sup>まつなぎ</sup>支群 馬縹カメガタン窯（馬縹町）

・宝立<sup>ほうりゅう</sup>支群 寺社カメワリ坂窯（上戸町寺社） 清水<sup>きよみず</sup>窯（上戸町寺社小字清水） 大畠<sup>おはたけ</sup>窯（宝立町春日野小字大畠） 法住寺窯（宝立町春日野小字法住寺） 郷カマノマエ窯（宝立町柏原小字郷） 西方寺窯（宝立町柏原小字西方寺） 鳥屋尾<sup>とやお</sup>窯（宝立町柏原小字鳥屋尾）

・内浦支群<sup>うきのべ</sup> 行延窯（鳳珠郡能登町行延） 河ヶ谷<sup>ががたん</sup>ミソメ窯（鳳珠郡能登町河ヶ谷）

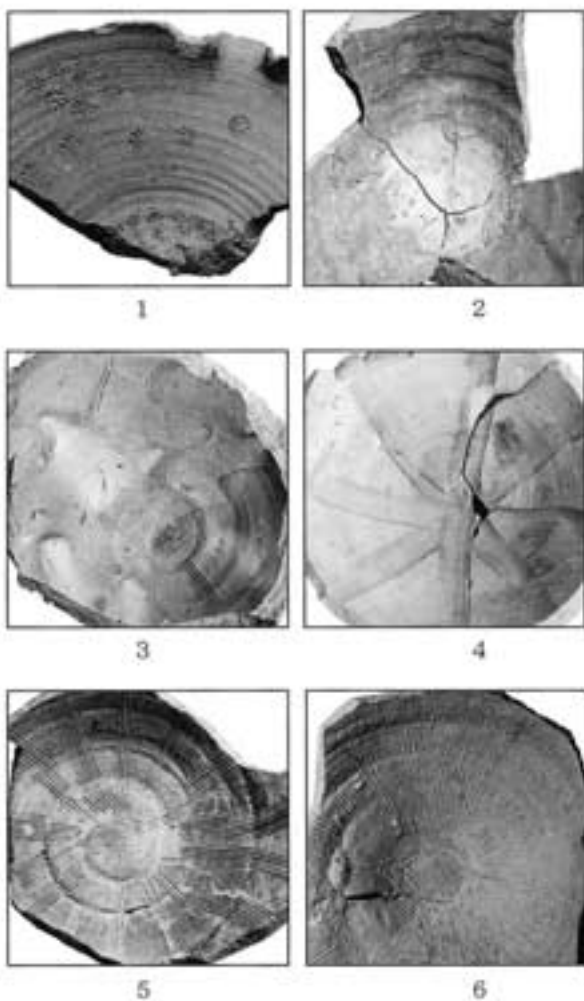
窯本体の調査例は、寺家1～5号、大畠1・2号、法住寺3号、西方寺1号の9基のみだが、そこから知られた特徴は、温度ムラを防ぐため全長を10m程度に抑制し（Ⅶ期の西方寺1号窯は例外とする）、かわりに幅を徐々に拡大した、ずん胴型の窯体であった。また幅の拡大とともに器種の配列を工夫し甕を火前に、鉢を窯尻に置くことで、歩留まりの向上を図っている。この結果、Ⅰ期の寺家3号窯では、甕16・壺11・鉢13の計40個を窯詰めしたとみられるが、Ⅳ期の大畠2号窯では、甕20・壺20・鉢70の計110個に増加したと復元された。これに歩留まりの向上を勘案すれば、1回の焼成で得られる製品は3倍以上に増加したと考えられる。13世紀を通して拡大を続け、14世紀に最大の流通圏を確保するに至った。しかしⅤ期には、甕の減産と越前窯を意識した研磨壺の増加に、衰退の兆候があらわれる。15世紀後半には、鉢への生産集約と粗造化が進行し、やがて廃窯へと至る。

珠洲窯は、吉岡康暢氏の精力的な研究によってその概要が明らかにされてきた。しかしまだ多くの問題が山積し、その実像に迫るには極めて困難な状況にある。ひとつに、まず発見されている窯数と流通量の不釣り合いがある。今後、窯跡が発見されたとしても100基程度と見込まれ、他の広域窯に比べてあまりに少ない。灰原出土陶片の編年観から各窯跡の使用年限を計算すると、1基あたり25年以上と類をみない長い耐用年数となる。それに比べて少ない灰原の堆積量から、焼成回数がそれほど多くなく（年2回程度）、長期使用が可能だったと見ることもできる。製品の形状、特に編年の指標となる口縁形態がバラエティに富むという傾向が、生産・技術伝承が、専門化・組織化されていなかったことを示唆すると考えれば、長期使用とも符合するが、絶対的な生産量の問題が残る。瓷器系の様式への強い志向を見せながら、なぜ須恵器系の製作技術を採用したのかという理由も、年間焼成回数の少なさから、技術習得の容易さ、失敗の少なさからという面があったとも考えられる。だが、東播系窯から直接的な技術伝習によって、そうした珠洲独特の様式を創業初期からなし得たとも考えにくい。

最後に、すり鉢の問題にふれておきたい。中世陶器の基本三種である片口鉢は、珠洲窯のオリジナルでないことは言うまでもないが、卸し目施入に関しては他産地に先行し普及すると考えられている。櫛目が須恵器の伝統的施文法であるというベースはあるものの、初期の波状文は中国磁器の劃花文の影響が予想される。この櫛目文と印花文による装飾から定型的な卸し目へという変遷は、非実用から実用へという通常とは逆の過程をたどったことになり、日本海側ですり鉢が急速に普及した理由とあわせて、なお検討の余地がある。

	三 崎		宝 立																馬 縹	内 浦	暦年代					
	寺 家 窯	大 屋 窯	寺 社 一 号 窯	清 水 窯	大 畠 一 号 窯	二 号 窯	三 号 窯	四 号 窯	法 住 寺 一 号 窯	二 号 窯	三 号 窯	四 号 窯	郷 一 号 窯	二 号 窯	三 号 窯	四 号 窯	五 号 窯	西 方 寺 一 号 窯	二 号 窯	三 号 窯	四 号 窯	鳥 屋 尾 窯	馬 縹 窯	行 延 窯	河 ヶ 谷 窯	
I <sub>1</sub>																										1150
I <sub>2,3</sub>																										1200
II																										1250
III																										1300
IV <sub>1</sub>																										1350
IV <sub>2,3</sub>																										1400
V																										1450
VI																										1500
VII																										

珠洲窯跡群構成表



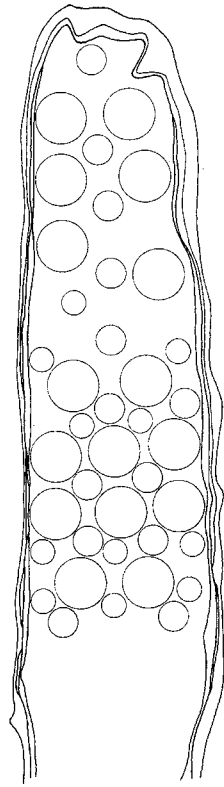
すり鉢施文変遷

1～4．法住寺2号窯 5．馬縹窯 6．西方寺3号窯

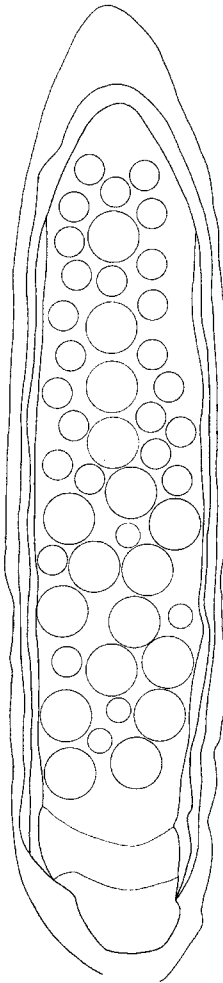


珠洲窯跡分布図

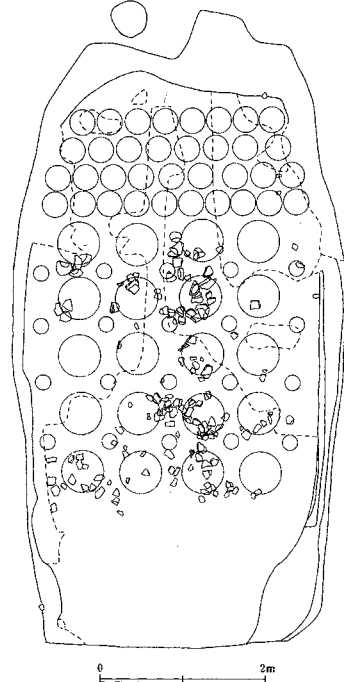
珠洲郡内浦町、鳳至郡柳田村、能登町は、平成17年3月1日合併し鳳珠郡能登町となっている。



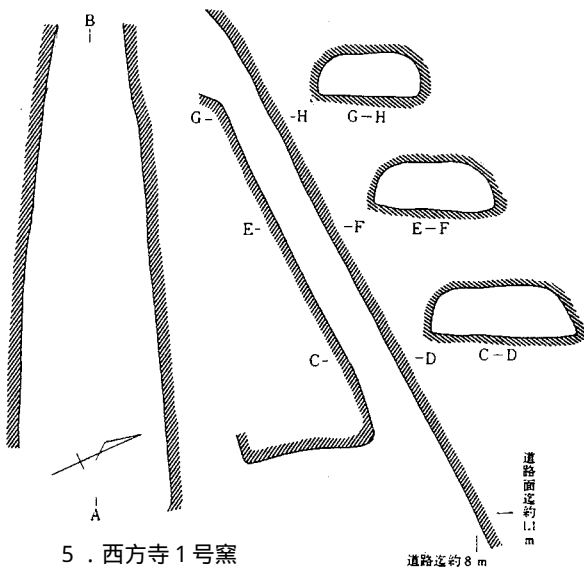
1. 寺家クロバタケ3号窯



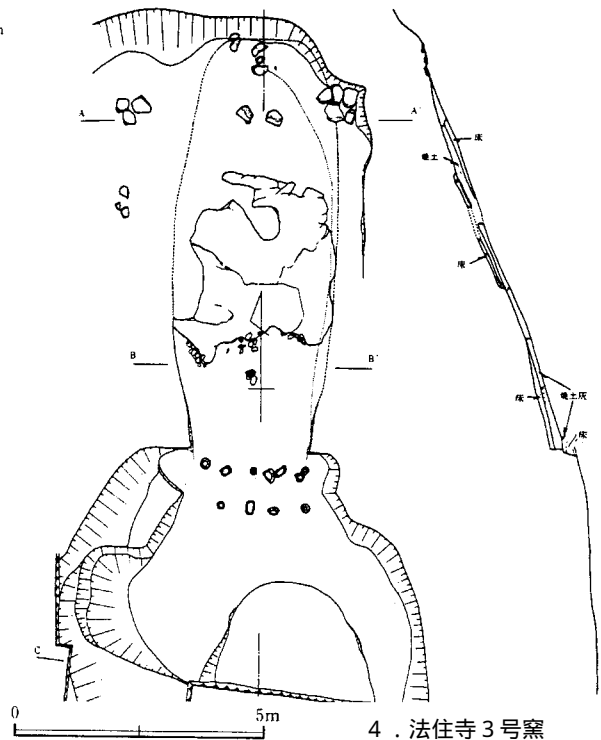
2. 寺家クロバタケ1号窯



3. 大畠2号窯



5. 西方寺1号窯



4. 法住寺3号窯

## 中世加賀・能登の甕・壺・鉢の生産と流通

岩瀬 由美（財団法人石川県埋蔵文化財センター）



### 生産の様相

石川県内には能登国に珠洲窯と堀松窯、加賀国に加賀窯と作見窯の計4カ所の中世窯跡が確認されている。珠洲窯は珠洲市・鳳珠郡能登町（旧珠洲郡内浦町）域で生産された須恵器系陶器で、これまでに約40基の窯が確認されており、12世紀中葉～15世紀代にかけて甕・壺・鉢の三器種を中心とした生産が行われている。堀松窯は志賀町小浦地内で灰原とみられる散布地が確認されている瓷器系陶器で、窯本体は未発見であるが、出土陶片から知られる製作技術や押印の意匠から加賀窯との関連が指摘されている<sup>(1)</sup>。甕・壺・鉢の三器種が出土しているが、壺・鉢は少なく、甕を中心とした生産が行われていたと推定され、窯の稼働時期は13世紀後半代の短期間とみられる。加賀窯は小松市戸津町から那谷町周辺で生産された瓷器系陶器で、12世紀後半に常滑窯の生産技術を導入して開窯し、14世紀後半に至るまでの14群46基の窯が確認されている。窯体構造が判明しているものは分焰柱を備えた地下式の窖窯である。生産器種は甕・壺・鉢を中心とし、中でも甕を量産している。作見窯は加賀市作見町に所在した窯で、備前窯の生産技術を導入して開窯したと推定され、16世紀末の1四半期程度の短期間の操業と想定される。生産器種は甕・壺・鉢を中心とする。

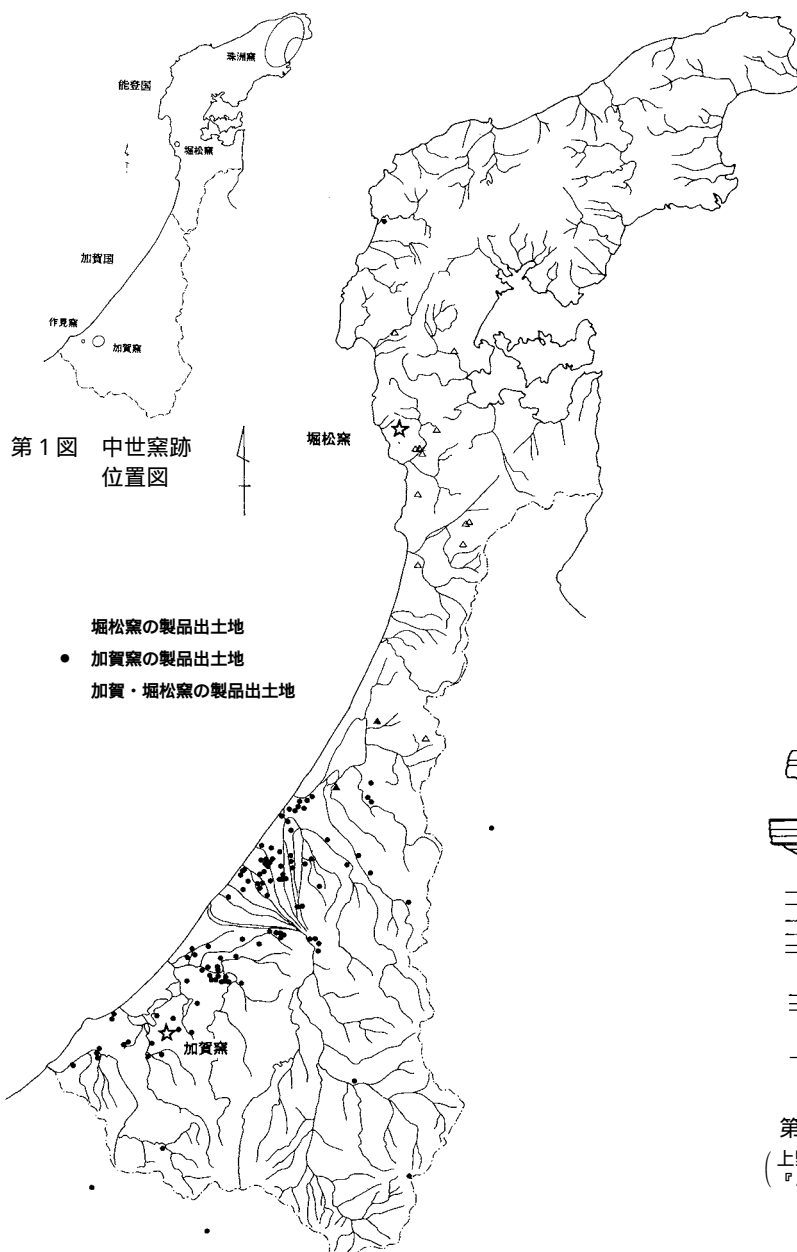
### 流通の様相

中世前期では、珠洲窯開窯以前とみられる12世紀第2四半期（常滑編年1b型式期）から能登・加賀を通じて常滑焼広口壺等の東海産瓷器系陶器が少量流通しており<sup>(2)</sup>、12世紀後半になると珠洲焼が能登・加賀の広範囲に多量かつ一気に流通する。開窯後まもなくは窯場近くの南加賀を中心とした地域を主な流通圏とし、生産の増大を図って次第に越前や越中に流通圏を広げていく加賀焼が能登には流通しないことと対照的である。能登では12世紀後半以降、珠洲焼が甕・壺・鉢ともに100%に近い割合で使用される。同じく国内で生産された堀松窯の製品は中能登を中心に出土が確認されるものの、短期間の操業であるためか流通量は極めて少ない。加賀では南加賀と北加賀で様相が異なり、南加賀では加賀焼を主体としつつも珠洲焼や越前焼が定量流通し、器種によっては珠洲焼が上回る様相を呈す。北加賀では能登と南加賀の中間の様相を示すが、三器種とも珠洲焼が主で、北加賀の北部で少量の堀松窯製品の流通も確認される。越前焼は南加賀では12世紀後半から確認されるが、北加賀での流通が確実視されるのは13世紀代に入ってからであり、13世紀代に加賀国全体が越前焼の流通圏に組み込まれたと推定される。能登においては12世紀後半～14世紀前半の越前焼の出土が散発的に確認されるものの、現時点では当該期において普遍的に流通していたとまでは言い難い。

中世後期になっても能登では14世紀後半～15世紀代は前代と大差なく、15世紀中葉以降に越前焼の流通量が甕・鉢ともに増加する。加賀では15世紀代にすでに甕は越前焼が主体となるが、鉢に関しては南加賀ですでに越前焼が卓越するのに対し北加賀では依然として珠洲焼が多くを占めることから、南加賀から徐々に甕そして鉢の順に流通量を拡大していった越前焼の様子が窺える。16世紀になると能登・加賀とも三器種全てにおいて越前焼が大半を占め、16世紀後半には新たに鉢を中心とした備前系の製品が少量確認される。実見し得た陶片の殆どは備前窯の製品と判断され、南加賀や北加賀南部で数点の作見窯の製品とみられる陶片が確認されたことから、作見窯の流通圏は窯周辺のごく狭域で、流通量も極めて少量であったと推定される。

（注1）垣内光次郎 2005 「北陸西部の諸窯 - 加越能の瓷器生産 - 」「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」資料集

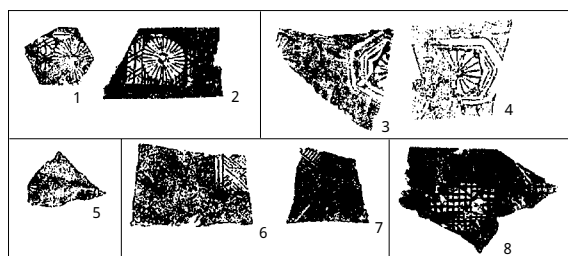
（注2）県内出土の東海産瓷器系陶器については中野晴久氏に実見していただき、ご教示を賜った。



第1図 中世窯跡位置図

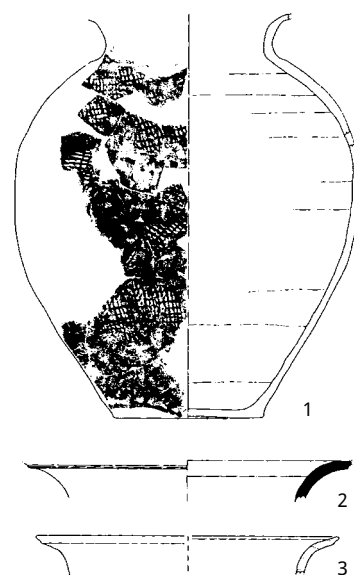
堀松窯の製品出土地  
● 加賀窯の製品出土地  
加賀・堀松窯の製品出土地

第2図 加賀・堀松窯出土遺跡分布図  
(S = 1 / 1 000 000)



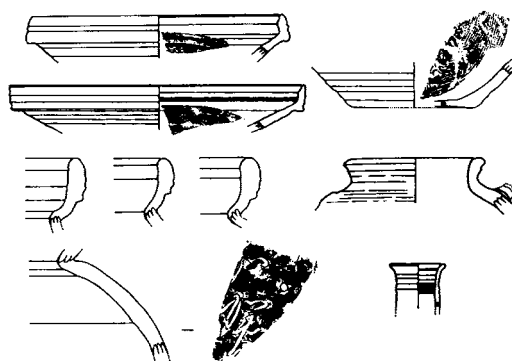
1・2：菊花文と斜格子 6・7：幾何学文  
3・4：菊花文と六角形枠 8：正格子と×印  
5：花文のみ

第5図 消費地出土堀松窯の押印集成 (S = 1 / 6)

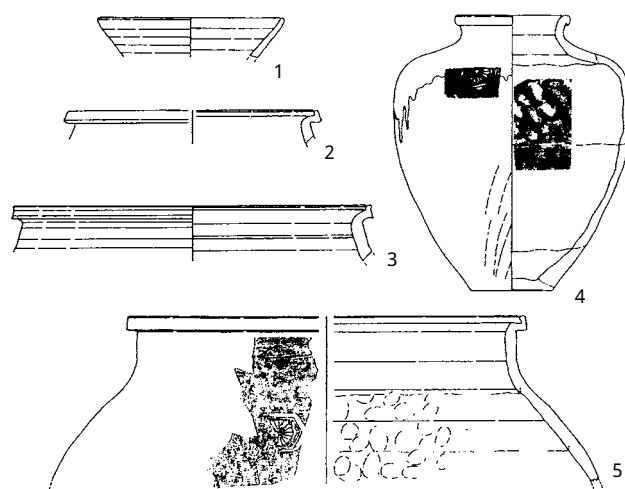


1：水白モンシヨ遺跡 2：東小室ボガヤチ遺跡  
3：小川新遺跡

第3図 県内出土の常滑焼 (S = 1 / 10)



第4図 作見窯灰原出土遺物実測図 (S = 1 / 10)  
(上野与一・宮下幸夫 1982「作見窯について」  
『小松市立博物館研究紀要第19集』小松市立博物館より転載)

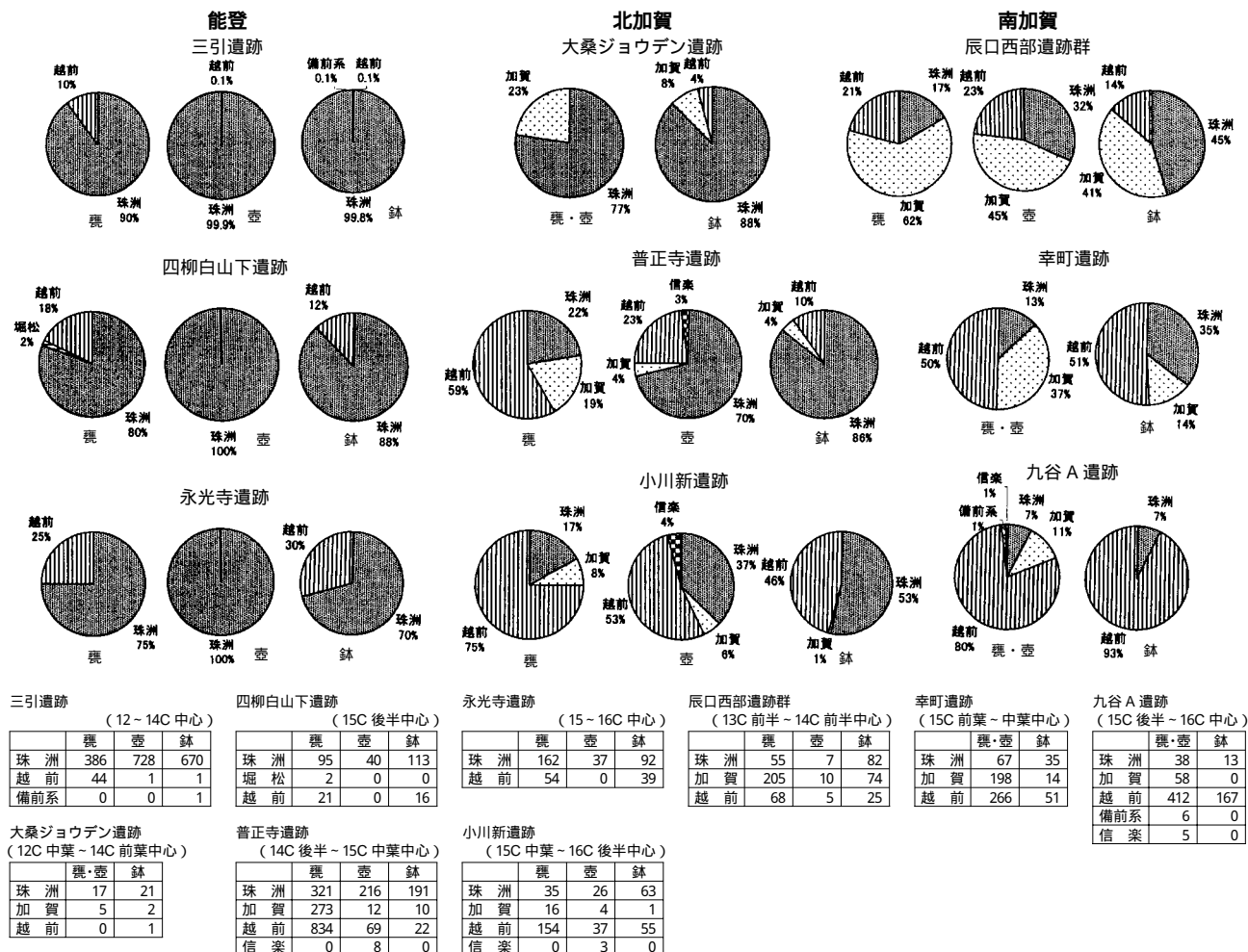


1・3：長者川遺跡 2：指江B遺跡 4：刈安野々宮遺跡  
5：木越光琳寺遺跡

第6図 消費地出土堀松窯遺物実測図 (S = 1 / 10)

時期	甕	広口壺・壺	片口鉢	窯跡	時期	甕	広口壺・壺	片口鉢	窯跡
1150 (前半)				(黒谷カミヤ窯跡) 二ツ型オクダニ窯跡	1250 Ⅲ 期 (後半)				黒谷ダイテンノウミ窯跡
I 期 (後半)					Ⅳ 期				黒谷カミヤ窯跡
1200 Ⅱ 期				黒谷カミヤ窯跡 黒谷ダイテンノウミ窯跡	1300 V 期				湯土カミヤ窯跡
Ⅲ 期 (前半)				湯土カミヤ窯跡	1350 Ⅵ 期				黒谷カミヤ窯跡
1250									

第7図 加賀焼略編年図(甕・壺 S = 1 / 24、片口鉢 S = 1 / 16)(注1文献より転載)



第8図 甕・壺・鉢組成図



## 富山県における中近世の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・擂鉢を中心にして -

宮田 進一（富山県文化振興財団）



### 1 はじめに

富山県における中世の甕・壺・擂鉢は、珠洲、越前、それに在地陶器である八尾と瀬戸美濃がわずかでである。単純な様相である。発表資料では、各時代の様相を詳しく述べたので、ここでは、陶器生産である八尾について、取り上げる。

### 2 八尾の生産

#### 窯の概要と器種

富山県の中央部、東の神通川と西の井田川に挟まれた丘陵裾の富山市（旧八尾町）深谷地内に立地する。県内唯一の中世窯である。窯は4基で、長さ10m、幅2mの半地下式竈窯である。窯下方に長さ50m、幅25mの灰層が広がる。灰層の北西尾根に7箇所、南側斜面に1箇所のテラス状遺構があり、作業場と考えられる（八尾町教委1984）。

採集された器種には、甕・広口壺・小壺・擂鉢・蓋がある。大多数が甕・広口壺である。無釉の瓷器系製品で、器面外面を板状工具でカキアゲ、ナデ仕上げを基本にしている。板の木口でハケメ状調整痕を残すものがあり、この調整は加賀に類似する。

甕・広口壺は、未発達や発達した「N」字状口縁部で、押印・ヘラ記号などの加飾がわずかに見られる。壺には広口壺以外に玉縁状口縁の壺がある。擂鉢は高台が付がなく、オロシメのあるものとなないものがある。押印の種類は少ない。

#### 時期

八尾の時期を検討するときに、八尾と加賀の類似点は共通認識されているが、常滑編年が加賀編年のどちらかをを用いるかによって、年代観が少しずつれてくる。13世紀前半～14世紀前後の酒井重洋氏（酒井1997）・13世紀後半の中野晴久氏（中野1996）、13世紀前半～14世紀初めの垣内光次郎氏（垣内2005）がある。加賀との比較から外反する三角形の口縁部（Ⅰ期）、N字状口縁部（Ⅱ期）とその発達した口縁部（Ⅲ期）という垣内氏の3区分に従って、図化された消費地資料の口縁部形態から検討してみると、Ⅱ・Ⅲ期のものが多いが、Ⅰ期も40%ほどある。そのことが、八尾の時代差を表しているとすれば、やや古い形態を残しながら八尾は13世後半に中心があり、遅くとも14世紀初めには終焉したと推測される。

#### 流通

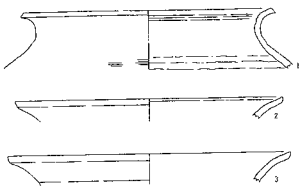
八尾の遺跡出土例は、60箇所以上を数える。その範囲は酒井氏が指摘したように県内一円に及び、県外では飛騨市江馬氏館跡に分布を見る。県内の出土遺跡では、陶磁器に占める八尾の割合が1%以下のものが大部分である。このことは、窯数の少なさと焼成技術の脆弱さによるもので、八尾の競争力の弱さと生産能力の限界を示し、やがて珠洲に対抗できず、八尾が自然消滅していった原因になったとされている（酒井1990）。ただし、窯から直線で32km離れている岐阜県江馬氏館跡で八尾が3%を占めていることは、山間部に販路を求めて、海運への依存の強い珠洲の交易に対抗した結果であろう（吉岡1994）。

ところで、八尾の流通を考える場合、窯から10km以内で、神通川流域にある富山市道場Ⅰ遺跡や中名Ⅰ遺跡などが参考になる。ヘラ描き文字（「界方」？）のある中名Ⅰ遺跡出土擂鉢は特注品と考えられ。また、この地域の八尾が2～3%台を示していることは、この地域が八尾の主な流通圏であるがわかる。更に、遺跡の立地状況から拠点の遺跡である道場Ⅰ遺跡では、八尾が20%を占めている（富山県文化振興2004）。このことは、八尾流通の集積地と考えるよりも、珠洲に対抗するために八尾窯の近辺にある拠点的な遺跡を中心に流通していた実態を示すものと推測される。このような中核的な遺跡が他の陶磁器指向を替えたりやその遺跡の衰退が、八尾の生産消滅の一因になったことも想像される。

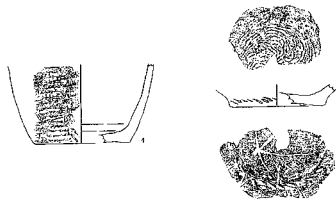
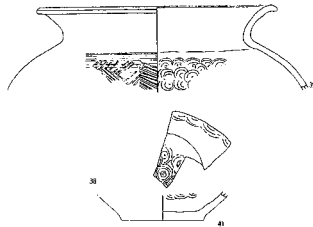
中世前期の様相(富山県)

12世紀後半

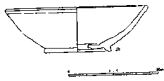
瓷器系



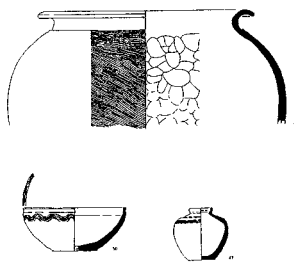
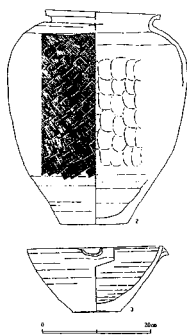
須恵器系



常滑



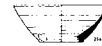
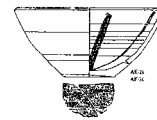
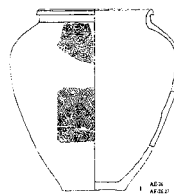
珠洲



中世前期の様相(富山県)

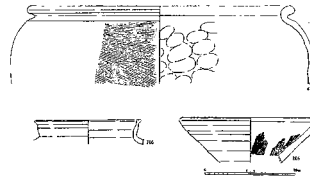
13世紀前半

珠洲

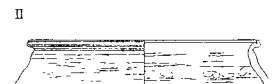


13世紀後半

珠洲

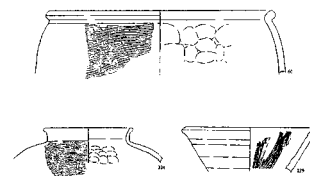


八尾



14世紀前半

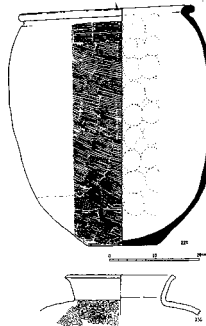
珠洲



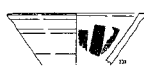
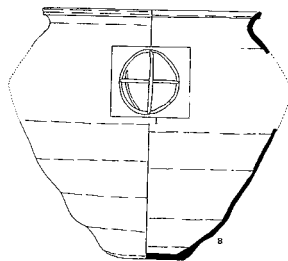
中世後期の様相(富山県)

14世紀後半

珠洲



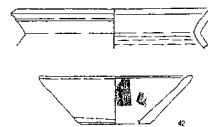
越前



中世後期から近世初期の様相(富山県)

16世紀前期

越前

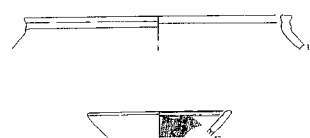


瀬戸英濃

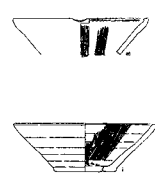


16世紀後期

越前

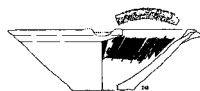
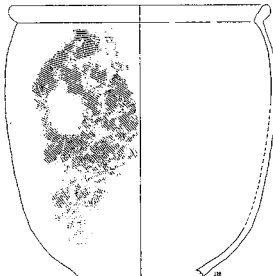


土師質播鉢



15世紀前半

珠洲



15世紀後半

珠洲



越前

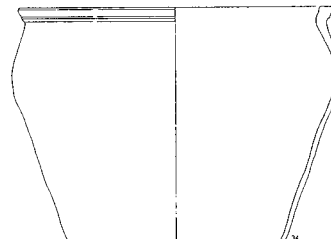


土師質播鉢

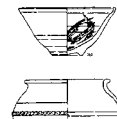


16世紀末から17世紀前半

越前



肥前



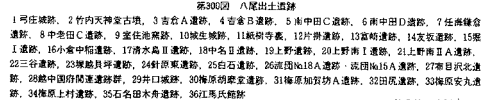
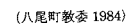
備前



越中瀬戸



八尾



## 富山県の中近世の様相

[illegible]

## 越後北部の中世陶器窯

鶴巻 康志（新発田市教育委員会）

### 1. はじめに

新潟県の北部、阿賀野川の北側は「阿賀北（揚北）地方」と呼ばれ、中世の有力在地領主が割拠し、国府からも離れているため、独自性の強い文化を持っていた。この地方で中世陶器窯が営まれていたのも、その歴史的な背景が影響しているとみられる。



### 2. 研究史

1980年の吉岡康暢氏による珠洲焼編年提示以来、東北地方の須恵器系の中世陶器の様相が徐々に明らかにされ、これらはいずれも「珠洲系」として捉えられ、個々の地域で出土する須恵器系の中世陶器が「珠洲焼」か、地元産なのかで議論が続いた。胎土分析の結果や、地方窯の編年研究の進展により、東北地方日本海側には珠洲Ⅰ期～Ⅲ期に並行する須恵器系中世陶器窯が認められるものの、消費地遺跡で出土する製品の多くは珠洲焼であるという評価が定着した。

### 3. 新潟県の中世陶器生産と流通

新潟県北部の中世窯跡群は「北越窯」・「五頭山麓窯」・「笹神窯」と呼ばれ、遅くとも13世紀前半には須恵器系窯として成立した後、13世紀の中頃に瓷器系窯へと転換する。陶器窯は、新発田市から阿賀野市にかけて連なる五頭連峰の前山にあたる丘陵地帯に分布する。中世陶器窯は須恵器系2、瓷器系5遺跡がある。

#### a) 須恵器系中世陶器窯

北沢1～5号窯・背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>炙<sup>あぶり</sup>窯がある。製品は片口鉢の内面に鋭利な櫛状工具によって施された振幅の大きい掻目から、珠洲Ⅱ期に並行する年代が与えられている。北沢窯 背中炙窯の時期差を想定でき、いずれも大枠では珠洲Ⅱ期に対比できるため、13世紀前半頃に比定される。

珠洲の片口鉢・壺T種、壺R種に対応する器種が主体である。北沢窯では、ほかに浄瓶・陶硯が生産されている。片口鉢は珠洲と異なり、陶片を挟んで重ね焼きするため、内外面に目痕が残る場合がある。

#### b) 瓷器系中世陶器

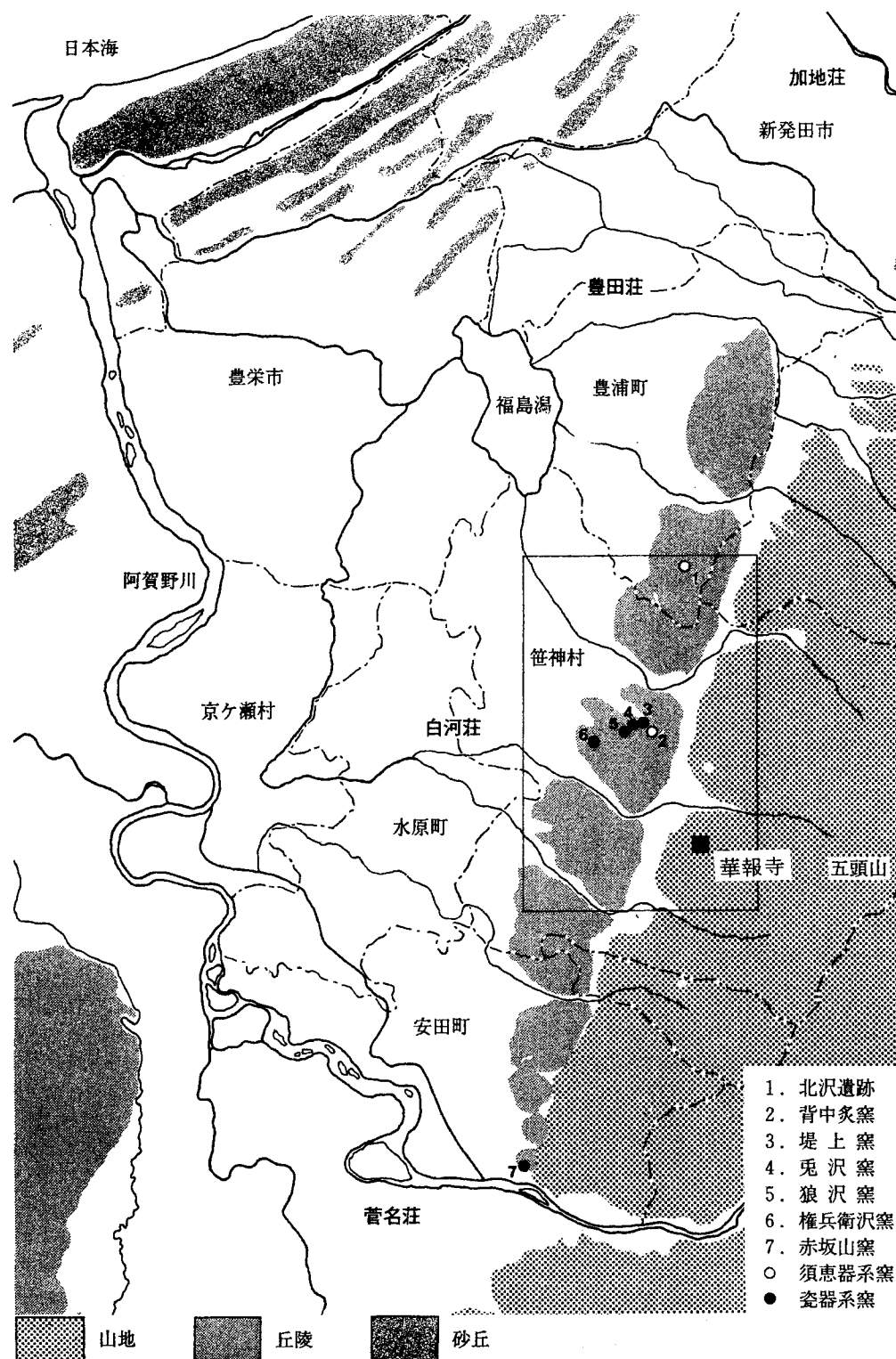
権兵衛沢1号窯、狼沢1号窯、兎沢窯・堤上窯・赤坂山1号・2号窯がある。甕類の口縁形態が受口状、N字状で、押印の施文位置が肩から胴にかけて多段に施される権兵衛沢段階（権兵衛沢1号・赤坂山2・1号）と、甕の口縁部がN字状のみで、押印は肩もしくは胴部に1段のみ施される狼沢段階（狼沢1号窯・兎沢窯・堤上窯・赤坂山2号窯の窯体埋土）に区分される。器種は甕・壺・鉢が主体である。前者は常滑5型式、後者は常滑6a型式に対応している。

#### c) 製品の流通

製品は新潟県北部を中心に分布するが、消費地遺跡での陶器組成に占める割合は低い。また、近年の研究では、山形県内の内陸部の遺跡で瓷器系の製品が確認され、越後国外にも流通していたことが判明した。

### 参考文献

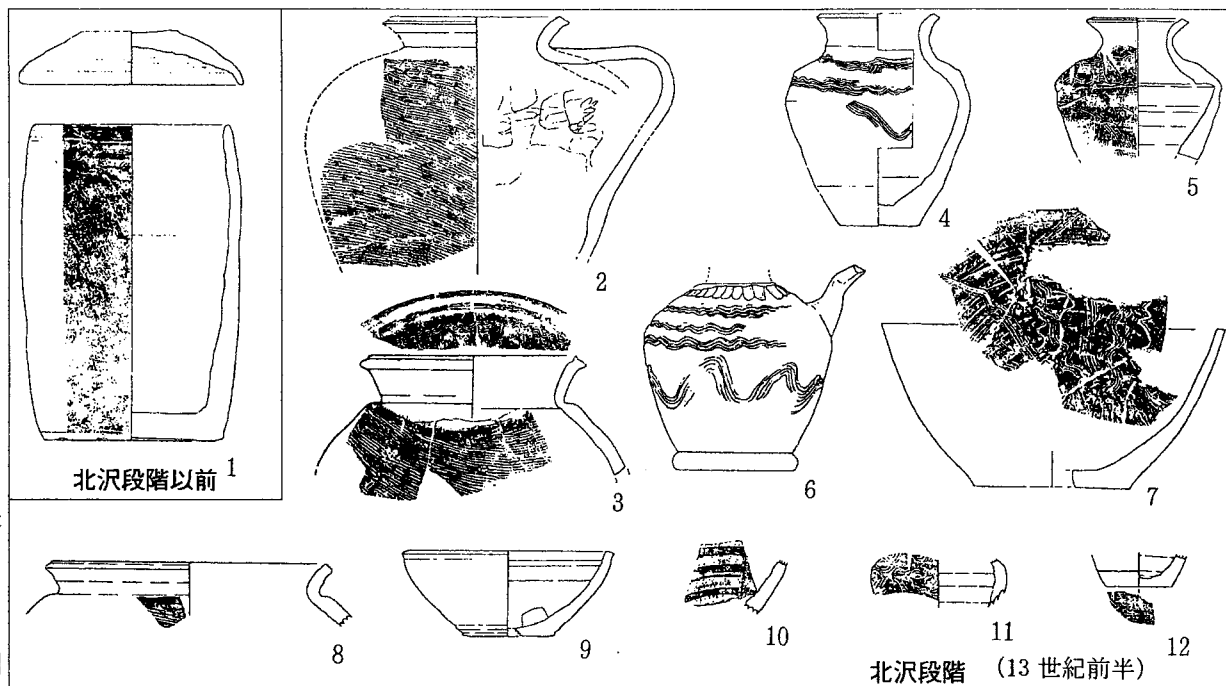
鶴巻康志2005「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』



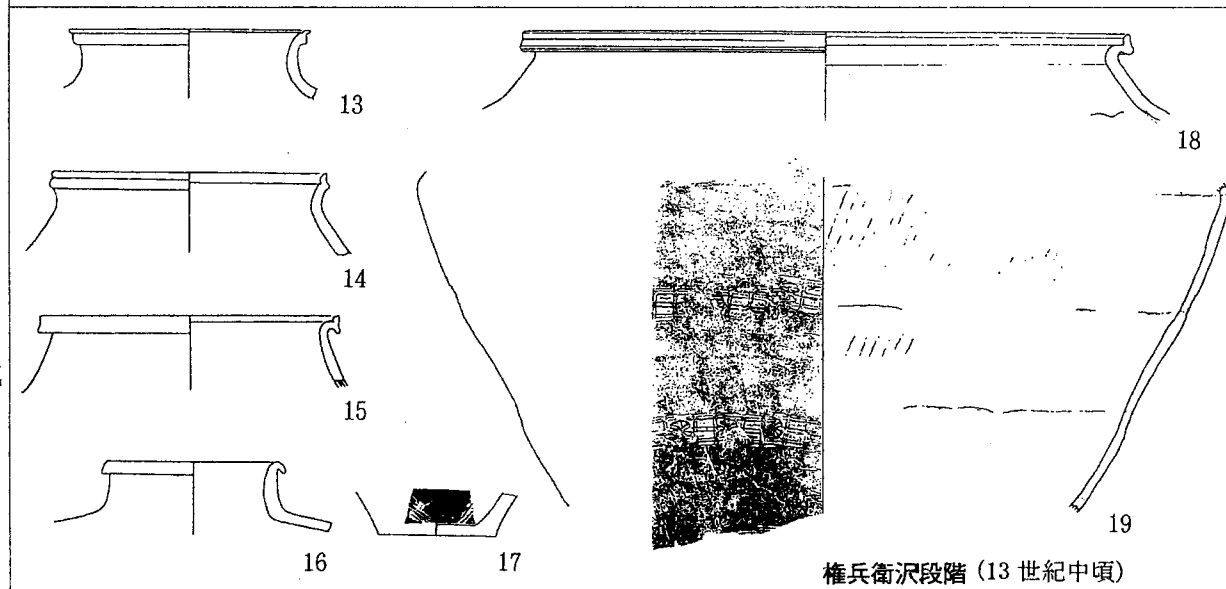
第1図 陶器窯の分布と周辺の地形（1/15万）（鶴巻 1996）

次ページ編年表で使用した実測図の出展は以下の通りである。1 安田町横峯1号経塚〔安田町教育委員会1979〕、2～7 豊浦町北沢1号陶器窯〔豊浦町教育委員会1992〕、8～12 笹神村背中炙窯〔吉岡1994〕、13～17 笹神村権兵衛沢1号窯〔中川ほか1970〕、18 安田町赤坂山窯〔渡辺1978〕、19 安田町六野瀬遺跡1号井戸出土赤坂山窯製品〔安田町教育委員会1992〕、20～27 笹神村狼沢1号窯〔中川ほか1973〕

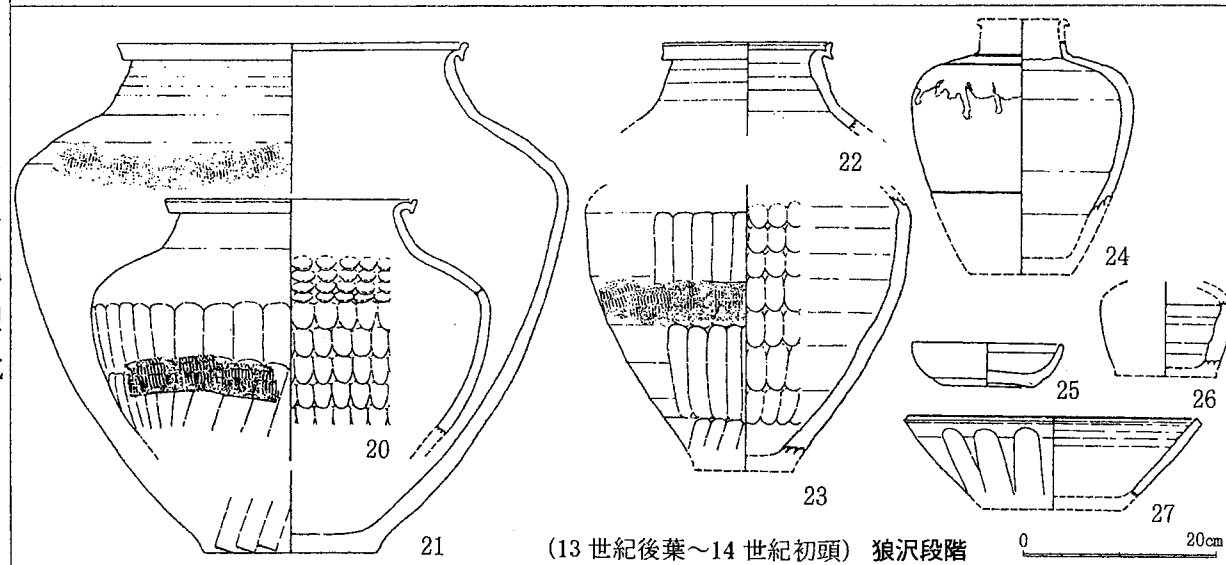
珠  
洲  
Ⅱ  
期



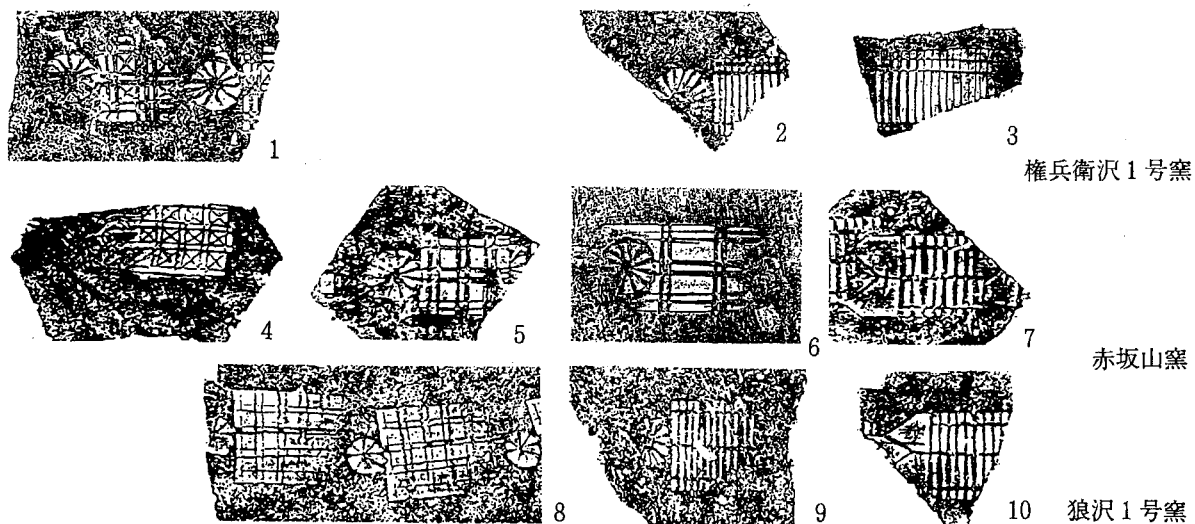
常  
滑  
5  
型  
式



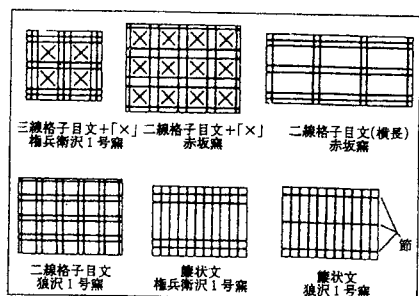
常  
滑  
6a  
型  
式



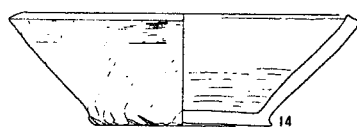
第2図 北越窯編年図(鶴巻 1997)



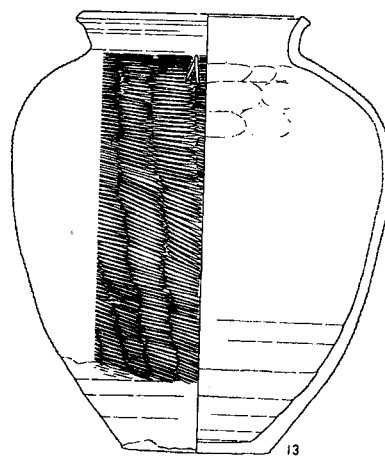
第3図 各窯の押印（鶴巻 1996）



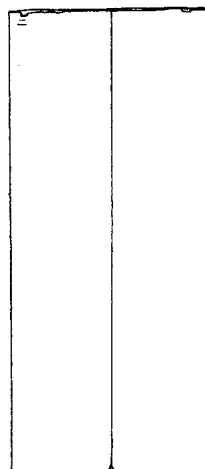
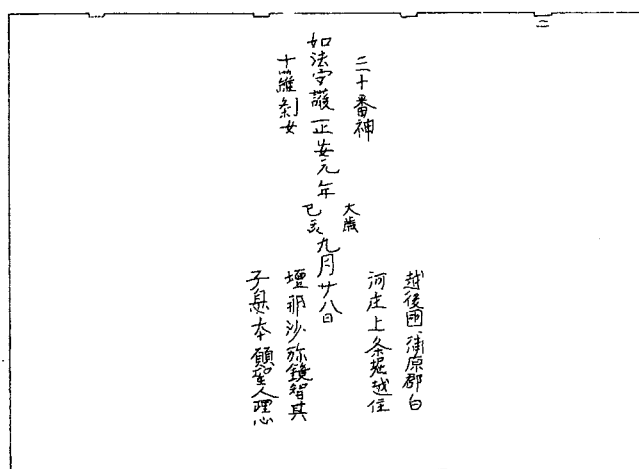
押印文の基本パターン（鶴巻 1991）



華報寺 目洗沢出土中世陶器



（珠洲壺Ⅰ種はⅣ1期基準資料・瓷器系鉢は狼沢段階）



銅製経筒



第4図 記年銘資料（吉岡 1994）

## 東北地方日本海側の陶磁器の様相

山口 博之（山形県埋蔵文化財センター）

中世出羽国の陶磁器の様相について概観したい。地域的には現在の行政区分のほぼ秋田県と山形県の大部分がこの地域にあたる。十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏の関連、東北地方の陶器生産の様相、十五世紀から十六世紀の陶磁器の様相などを中心として扱う。

十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏



この時期の陶磁器は、中国を産地とする陶器や白磁を中心とする陶磁器と、出羽国在地産の陶器、広域に流通している珠洲などの国産陶器、そして土器であるかわらけが存在する。8世紀から11世紀までの貿易陶磁器の数量は非常に少ない。増加するのは12世紀代の後半になってからである。白磁碗Ⅳ類を代表とする白磁の碗皿類、白磁四耳壺、劃花文青磁碗などの組成が見られる。この様相は、岩手県平泉町の平泉藤原氏に關係する平泉遺跡群の組成に似る。

平泉遺跡群から見いだされる主要な陶磁器の器種構成を八重樫忠郎は「平泉セット」と呼び、その分布から平泉藤原氏との深い關係を読み取ろうとしている。しかし「平泉セット」を、出羽国の中で見いだすことは多くはない。平泉では多用される東海系陶器はほとんど持たず、わずかの手づくねかわらけや白磁、日常的な甕・壺・播鉢は須恵器系陶器で構成されるセットが、十二世紀の日本海側出羽地域の特質をよく表している。こうしたセットこそが出羽国では一般的な組成をなすものとなる。

東北地方の陶器生産

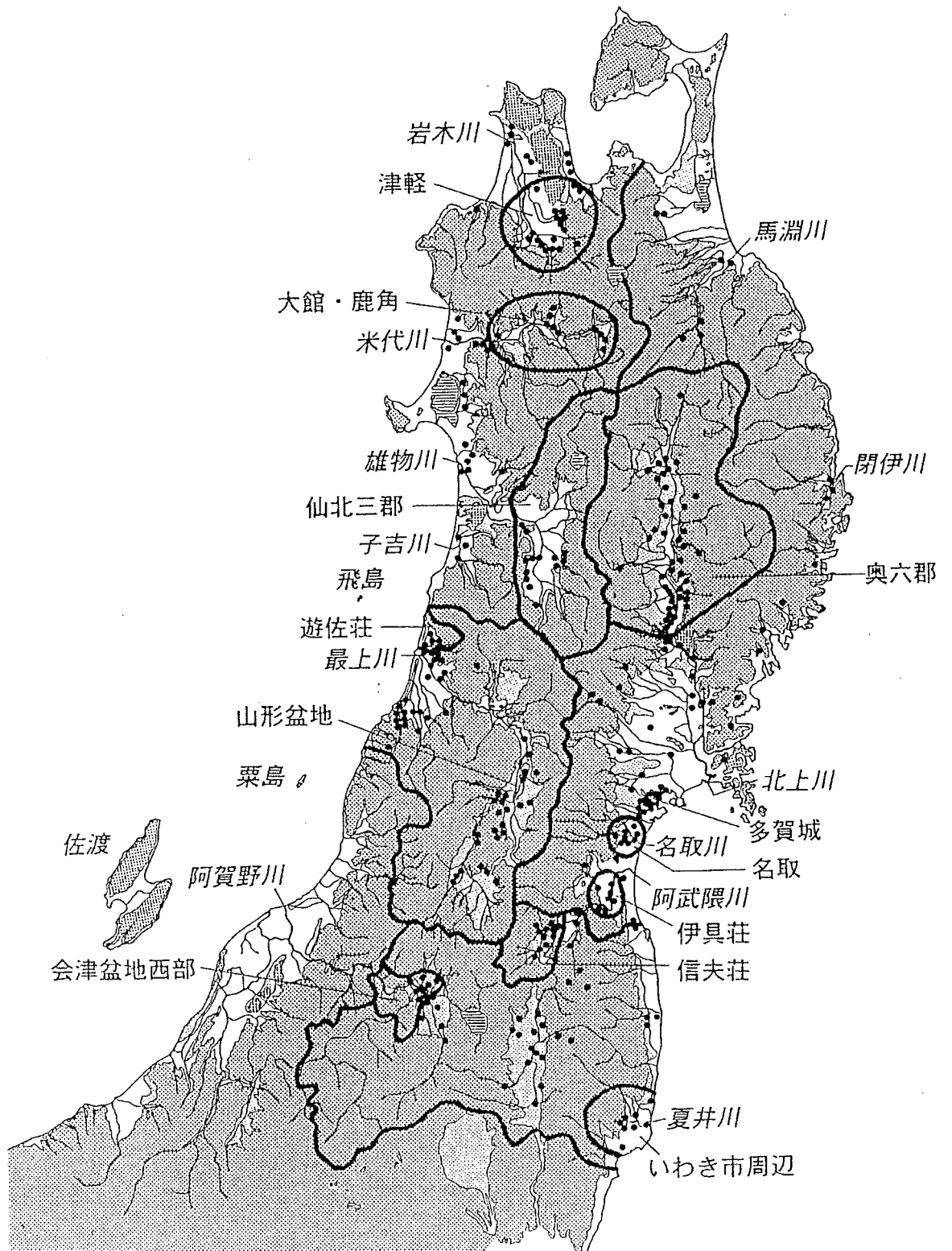
奥羽の陶器窯跡では、大きく分けて11の窯跡群を見いだすことができる。この地域の陶器生産はやや断続的にはあるが、12世紀半ば前後から14世紀前後までの約150年間にわたって営まれている。列島の中の中世陶器窯の動向とこの地域は無縁ではない。奥羽の陶器窯の主な供給先は、数郡規模のものと数国規模のものに分類することができる。宮城県地域の瓷器系窯は分布が狭い。数郡規模といっても過言ではない。基本的には、常滑の卓越地域でありこの製品と同種のものを作成しているのであるから、補完的な意味が強い。対照的に日本海側の須恵器系陶器窯製品の分布が数国規模と大きな分布圏を形成するのは、この地域の経済活動の範囲がもともと大きいことを示している可能性がある。

脇本城出土の貿易陶磁器群とその周辺世界の様相

脇本城の出土遺物は大きくは国産土器・陶器と貿易陶磁器から組成される。小型の碗・皿さらには特殊品などに貿易陶磁器が多く組成され、大型の甕や日常用品である播鉢には国産の陶器が組成されるというおおまかな傾向を知ることができる。遺物相は、ほぼ十五世紀～十六世紀後半を主体とする遺物組成と見ることができる。小野正敏は非日常的な遺物が陶磁器群に組成されることについて、これらを「威信財」と見て、領主権力の様相が遺物に反影しているものとしている。この時期、貿易陶磁器の潤沢な供給量が保証され、流通の円滑化が保証されていることを示している。こうした遺物相に在地要求の事実を見いだすことができる。15世紀前半ころを中心とした時期に、交通の要衝などに、在地勢力の城館が営まれ初め、それは戦国期を通して営まれ続けてゆくということになる。それらの勢力は様々なレベルで相互に影響を及ぼし合っていた。遺物組成からみれば、興味深いことにある程度共通する遺物組成を持つことから、物あるいはそれが飾られる空間をも含めての価値観も共通していたのである。無論こうした状況には宗教勢力も無縁ではない。

酒田を出、赤間関を經由し品川を目指す幕府領米積出船の所要日数は、早い船便で約1カ月であった。北陸と東北地方日本海側とは、海上交通を介して深い結び付きがあり、陶磁器の様相にもその一端が現れているのである。

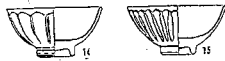




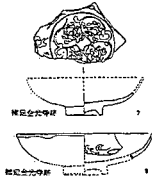
# 脇本城出土遺物の広がり

脇本城 文献96より

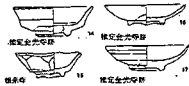
広域比較 文献37より



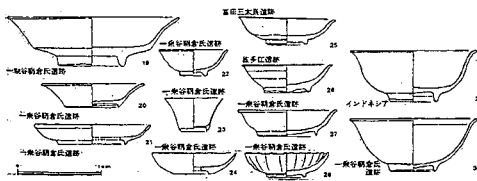
龍泉窯系碗B4類



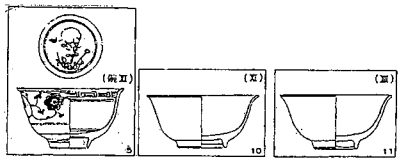
白磁碗皿B群



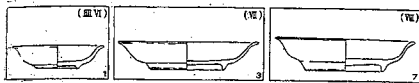
白磁碗皿D群



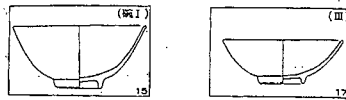
白磁碗皿E群



染付碗B群



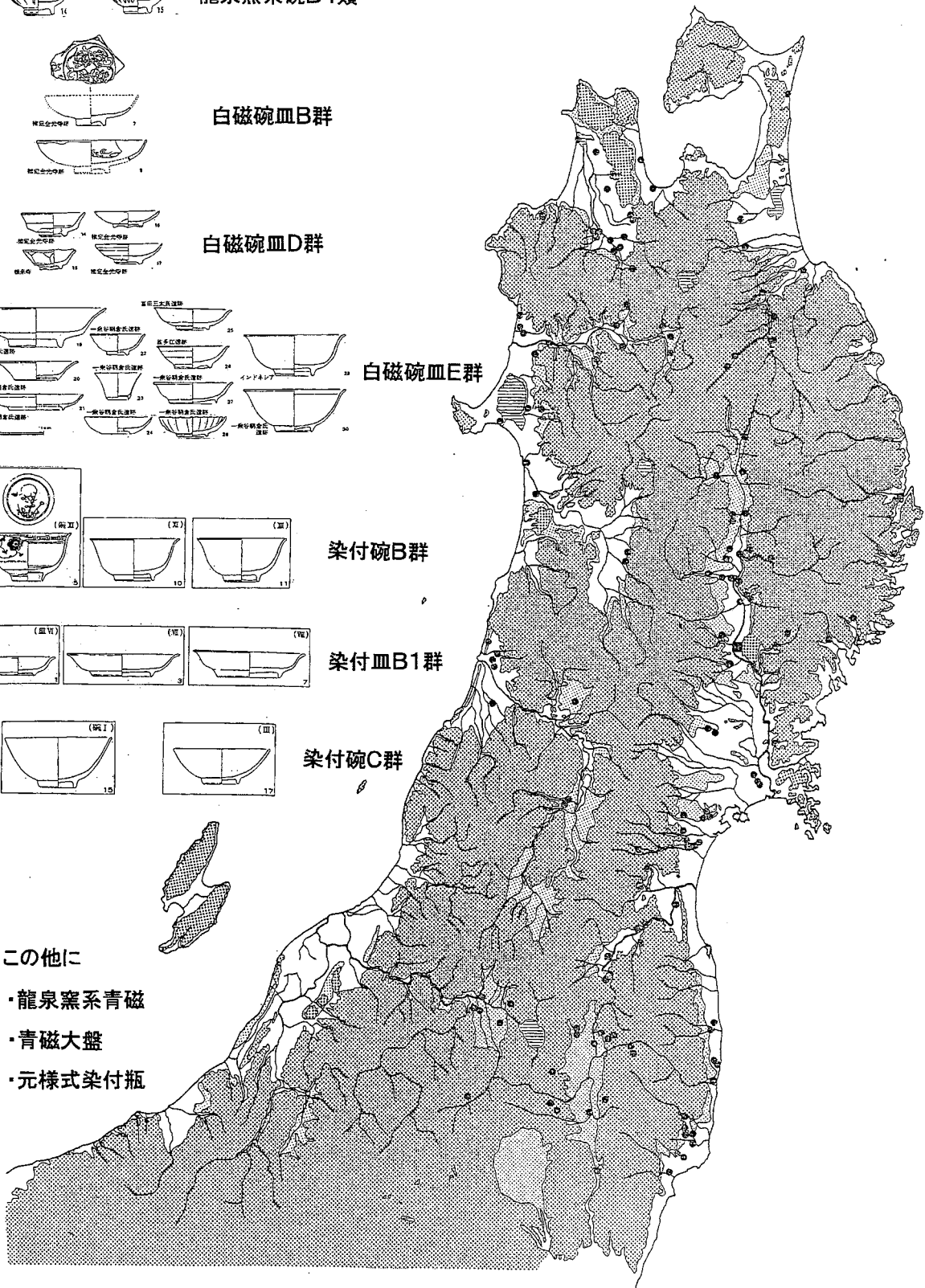
染付皿B1群



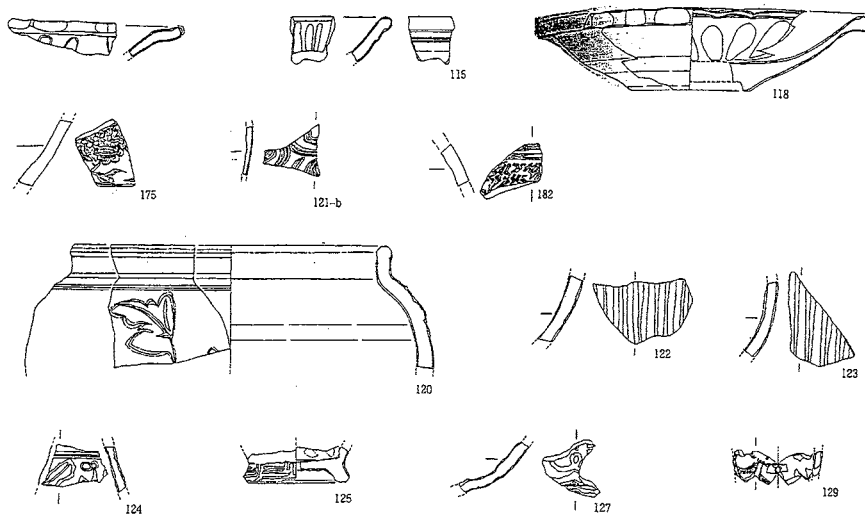
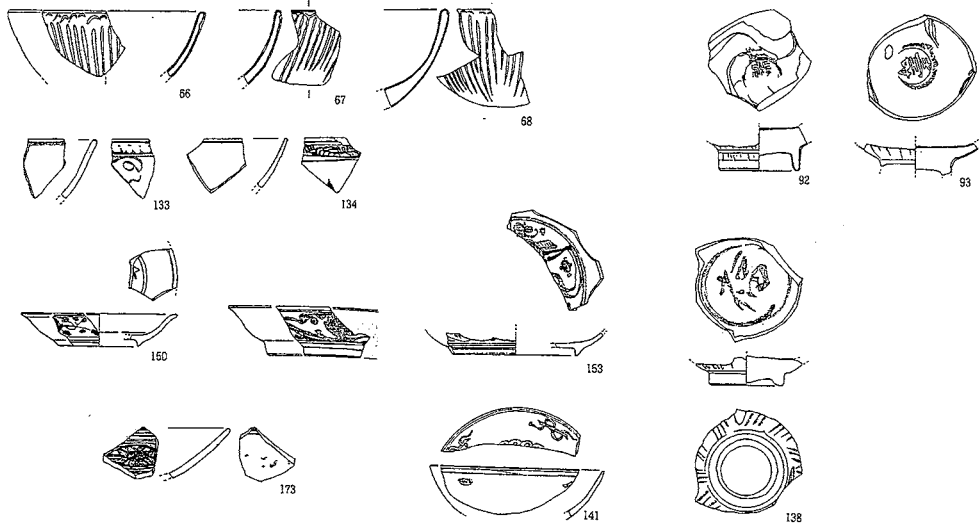
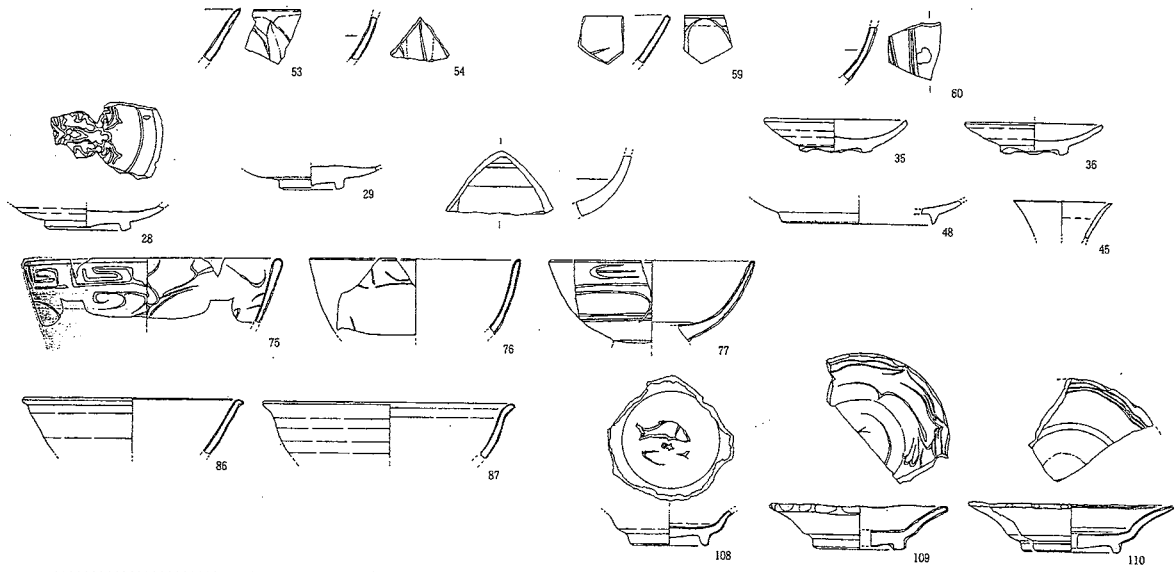
染付碗C群

この他に

- ・龍泉窯系青磁
- ・青磁大盤
- ・元様式染付瓶



# 鶴ヶ岡城の主な出土遺物





討論風景

## 討論と展望

横山 誠（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

討論にあたって、まず司会の藤田邦雄氏は「中世土器・陶磁器の流通経路の復元へ向かう」という方向性を示した。その上で、「技術系譜の確認」、「主に中世前期における産地から消費地までの流通経路はどのようなものであったか」というテーマを中心に討論は進められた。

まずは、技術系譜の確認であるが、徳永貞紹氏（佐賀県）・榊原博英氏（島根県）の報告により、基本的に須恵器系の窯が九州・中国・四国地方のほとんどを占めている状況が確認され、岩田隆氏（福井県）による宮谷窯の報告例があるものの、積極的に若狭湾を越え純粋な東播系の窯が東へ行くことはないという共通認識が得られた。北陸から東北地方について、鶴巻康志氏（新潟県）は、北越窯において技術は珠洲、窯構造は東播と二つの影響を受けていると報告された。山口博之氏（山形県）は東北地方の須恵器系の技術は西日本とは少し異なるとして、器種の類似や生産年代などから珠洲系と言える」と述べられた。特に北陸以北の日本海側は珠洲窯の影響が大きいと言える。

藤田氏はこのような技術系譜から、若狭湾以西にあたる九州・中国・四国地方、窯場が瓷器系のみである知多・渥美半島周辺地域、須恵器系と瓷器系の窯場が混在する北陸地方、太平洋側に瓷器系・日本海側には須恵器系の窯場が多い東北地方といったようなグループ分けを提言した。

次に流通経路の問題であるが、まず水路と陸路があることを理解した。水路では日本海・太平洋・瀬戸内海などにおける「港」を基点とした広域流通があり、さらにそこから河川・湖沼などの内水面を利用し展開するという経路がある。陸路については岩瀬由美氏（石川県）が加賀窯から越中方面の流通に関して、能登廻りの水路よりも陸路の利便性を述べられるなど、その他多くの報告者からも提言された。さらに山口氏は東北地方の流通が奥州藤原氏の影響を受けていることなどから流通と支配者の関係も述べられた。

また流通範囲についても多く意見が出された。宮田進一氏（富山県）は八尾窯について海運の依存の強い珠洲窯との関係から山間部へ販路を求めたと述べ、鶴巻氏は製品の胎土や押印資料などからもその広がりを報告されている。さらに珠洲焼について大安尚寿氏（石川県）は若狭湾以西には一次流通していないと述べられており技術系譜についてもそうであったが流通に関しても中世の段階では若狭湾を挟んで異なった様相が確認できる。しかし徳永氏の報告の中で14世紀後半から15世紀前半に若狭日引製の石塔が肥前西部沿岸部などに多数搬入されたという例もあり、非常に興味深く今後検討していく必要がある。

このことを踏まえ、藤田氏は若狭湾の東西の壁を越え東北から九州まで広域流通する近世初頭の肥前窯の陶磁器について各地の状況を確認したが、九州を除いて碗・皿類は早い段階から流通していることが確認できたものの、甕・壺・播鉢については調査・出土例が少ないという認識であった。

討論の最後に吉岡康暢氏が総括として指摘されたが、生産地・消費地に物資の「集散地」を加えた流通システム、広域窯と在地窯の消長や密接な関わりなども検討することが、今後の課題である。また生産・流通のコスト、担い手の関わりや時期（画期）による変化なども合わせて考えていく必要がある。まだまだ問題は山積であるが今回の研究集会では、人々の日常生活を支えた甕・壺・播鉢を中心に流通経路、システムの復元・解明に向けて前進できた事は非常に有意義であった。